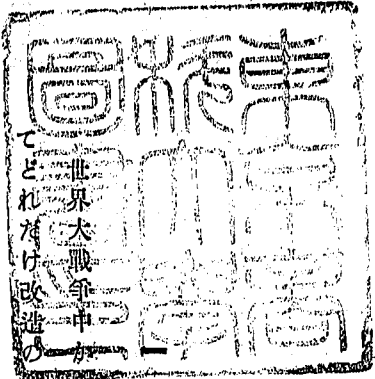


三 經濟危機と經濟恢復

一 行き詰れる世界と其展開

— 階級闘争論と絶対永久のアプリオリ認識論よりの解放に就てアインシュタインを懐ふ —



世界大戦争中から盛んに唱へられた社会改造論は其聲が大であつたが實際戦後に於てどれだけ改造の實を擧げて居るであらうか。否却つて改悪されて居ることは、何人も認むる所である。然らば現在を以て措いて近い将来に於いて世界が改造せらるゝ見込があるかと云ふに是れまた甚だ望み少ない事であるかのやうに見える。ドイツを亡ぼしてしまひさへすれば世界の表面から軍國主義を一掃し得るかの如く考へウキルソン

の言ふ如く、世界は人類にとつて住みよい所となるであらうと望んだのは悉くあだとなつてしまつた。ウキルソンによつて瞞着された人々が多太の望みを懸けて置いた國際聯盟は今果して如何。また國際労働會議の創設によりて労働問題の解決に數歩を進め得べしと考へた事も、實際に於いて殆んど何等得る所なく、之れに参加した日本は、たゞ數幕の茶番狂言を演じたに止まつて、日本國內の労働不安は刻一刻高まりつゝありとも、決して緩和せられたりと云ふを得ない。之れを世界の全局に見るも、英國の労働不安は益々高まり敵であつたドイツの經濟回復は遅々として進まず、世界の通商貿易は依然として不振の狀態にあり、一時は世界の成金國と傳へられた日本も、其の餘波を受けて、其の不景氣は何時消えるか豫測すべからざる有様である。世界は刻一刻暗黒裡に陥りつゝありて、何等光明の認むべきものがない。思想上に於いても走馬燈の如く種々の社會思想が起つて來たが、其の何れが世界改造の大使命を擔つて立ち得るか甚だ覺束ない有様である。

世界を今日の如く悪しくしたものの、澤山ある中、私を以て見れば其第一は世界の表面からドイツを亡ぼしてしまはうとした根本的に誤まつた憎惡思想及び其の思想の基く憎惡政策の實行之れである。即ち侵略主義と侵略主義との衝突之れである。

産業上に於ても思想上に於ても學術上に於いても政治上に於いても、將又社會上に於いても、ドイツが存在するのは、世界の向上發展に必要缺く可からざることである。否、英國系の英米文明は既に行詰つて居つた。其行き詰まれる世界に清新の氣を吹き込むべき使命はドイツにあると言つてもいゝのである。其ドイツの文明に軍國主義帝國主義の色彩の濃厚であつた事は否定が出來ない、乍併軍國主義帝國主義は、ドイツが獨占して居たわけではなし。二十世紀初頭の文明は皆軍國主義帝國主義の色彩の濃厚なものであつた。此事は曾つて資本的侵略主義の害を論じた際、屢々論じたが故に、拙著『黎明錄』并に『暗雲錄』（前段收録）の、今詳しくは論及しないが、帝國主義軍國主義の故を以てドイツを亡ぼすべしと云ふのは意味をなさない。帝國主義軍國主義の故を以て亡ぼすべしとならば、世界中の文明國は皆亡ぼされなければならぬ運命にあつた。ドイツ一國を亡ぼした所で、世界の表面から軍國主義帝國主義を一掃することは不可能である。帝國主義軍國主義

の全滅と云ふ事は、もつと大なる問題もつと深く人生に根ざして居る問題である。而してそれから解放は、たゞ一國の滅亡たゞ一遍の戦争だけで決して出来ることではない。人類文明の秩序的発展に依つて、征服慾から解放される外はないものである。若し英米の論者にして、ドイツを亡ぼすことによつて眞に帝國主義軍國主義から解放されると考へて居つたとするならば、彼等は甚だしく性急であつたと云ふ非難を免れない。併し實際は、彼等は軍國主義侵略主義からの解放よりもドイツの滅亡を目的として居つたのであつて、侵略主義からの解放は一の口實に過ぎなかつたのである。それとして見れば如何にも巧妙な口實であつた。併し我々は口實としての侵略主義よりの解放と云ふ事には、何の興味をも有しない。之れに反して、眞面目に謂ふ所の侵略主義よりの解放は、我々が永く之れが爲めに戦はなければならぬ所の高い理想である。英米論者の解放論は、一口實に過ぎなかつたが故に戦後の世界は改造せられて居ない。彼等はドイツを打ち負かすと云ふ目的を十分に達した。彼等としては満足であらう。併し乍ら世界は今や全然欺かれたものとなつて居る。のみならず、却つてドイツを亡ぼすと云ふ事のために侵

略主義よりの解放は、益々速くなつてしまつたのである。

二

『實業之世界』の前號に於いて、野依君は社會主義を是認するか否認するかと云ふ質問を發して、普く答案を求められた。私は之れに對して、今日かゝる質問を發するのは野依君に似合はしからぬ時勢遅れの話であると思つた。

今や社會主義は、之れを是認するもせざるも世界の大なる運動である。之れを否認すると云つた所で、現成の大なる活運動はどうする事も出来ない。之れを是認すると云つた所で、其の運動には殆んど何物をも加へる所が無いのである。社會主義が斯くの如く大なる運動となつたのは、世界が段々行き詰まつた結果である。此の行き詰まりを展開するに非ざる限り、如何に否認すると云つた所で、社會主義運動は消え失せるものではない。併し社會主義を是認すると云つた所で、果して社會主義の實現によつて行き詰つた世界を救ふ事が出来るか否かは別問題である。我々は現實の社會主義運動を見なければ

ばならぬ。而してそれと同時に、此の實際運動が世界改造に如何なる關係をもつかを靜に考へて見なければならぬ。社會主義は社會主義の爲めの社會主義ではない。私は常に云ふ社會主義は一の手段であつて目的ではない。社會主義を主張するものも、物好きに之れを主張するのではない。之れによつて人類をより幸福ならしめんが爲めに主張する。故に社會主義以上に、此の目的を達するに有効なる手段があるならば、社會主義者は躊躇する所なく其主義を捨ててであらう。若し然らざれば、彼等は人類の幸福を冀ふものではなくして、單に一の主義者であると云ふ譏を免れない。私が社會主義を目的に非ずして手段であると云つた事に對して、我邦の社會主義者は、河上肇博士始め猛烈に攻撃を加へられたが社會主義の本家本元たる人々は、皆明に社會主義は一の手段であると云つて居る事は、拙文『ボルシェヴィキズム研究』(本全集第五集)に収録に稍詳しく述べた通である。我々が社會主義に對する取捨の標準はそれが果して人類の眞の幸福の増進にどれだけ力を持つかと云ふ所にある。即ち何處までも一の手段として判断するものでなければならぬ目的は人類の幸福、人生の解放共事に存する。就中當面の問題としては、此の行き詰まりの世

界を救ひ出すに、社會主義がどれだけの力を持つかと云ふ事が我々にとつて重要な問題である。野依君が發問した社會主義を是認するか否認するかに對する答は此の立場からのみにしてなすべきものであると私は信じて居る。

併し乍ら、一概に社會主義と言ふけれども、抑も社會主義とは如何なるものであるかと云ふ事は、極めて漠然として居る。ゾムバルトは社會主義とは何ぞやと云ふことは戦後の世界に於いては、以前よりもなほ解らなくなつて來たと云つて居る。此の問題に對する答へ方は様々であらうが大別すれば二つある。一つは現實的解答であり、一つは綜合的解答である(ゾムバルトは之を後天的先天的と名けて居る)。今日學問上に於いて通説となつて居る答は主として前者であつて、現實的に社會主義とは何んであるかに對して答へんとして居るのである。是れは綜合的の解答よりも手近であり、また容易である何んとなれば、今日の世界には社會主義を標榜した所の大きな現實運動があり、此の運動を捉へて社會主義は斯くの如しと答へるのは、決して困難な事ではないからである。即ち現實の社會主義運動をなして居るもので殆んど唯一有力なる運動は社會民主主義即

ちマルクス派の社會主義之れである。此の現實の社會主義たる社會民主主義は次の二特色を備へて居る。(第一)第四階級労働階級の解放運動たることは是れである。言葉を換へて言へば階級闘争運動たることは是れである。(第二)は此運動には一個の社會學說即ち唯物史觀に基く社會進化學說があり其學說に基いて一個の社會的理想を標榜し、一切の労働運動社會運動を此理想の實現手段と認めることは是れである。社會民主主義とは現實の社會運動を其の社會的理想に結び付ける爲に、之に階級闘争てふ意義を與へることを指して云ふのである。分り易く圖で示せば左の如くである。

労働者階級——労働階級——労働階級

——労働階級——

労働者が自己の運命に満足せずして、向上を求むる所の運動がある。即ち労働運動社會運動是れである。此運動其もの丈けでは、未だ社會主義及其實行ありとは云へないのである。其中には社會主義的なものもあらうし、さうでないものもあらう。兎に角、二十世紀の世界は労働運動の世界である。之れは二十世紀が行き詰つた事を端的に物語つ

て居るのである。トコロが社會民主主義は此の労働運動を單純なる労働運動たるに止めず、之を彼等の説く所の社會進化理法の實現の一手段たらしめ、其社會的理想へ到達する一の階段たらしめようとするのである。それには、労働運動に一種の理想を與へなければならぬ。労働運動に思想的根柢を與へなければならぬ。其基調として與へらるものは、即ち階級闘争の思想之れである。労働運動を單に労働者の經濟生活の向上運動たるに止めず、社會全體の運動たらしめんが爲めには、其の運動が目前の労働條件の改善のみの爲めでなく、一種の社會理想の實現と云ふ大使命の爲めにする運動であると云ふ事を労働者に教へ込まんとするにある。之れが社會民主主義と云ふ一つの社會主義である。而して此社會民主主義即ちマルキシズムには互に相異なる二の方面がある。即ち革命的基調と進化的基調と之れである。

三

社會主義は戦後に於いては革命的色彩が濃厚となつたが、戦前に於いては進化的色彩

が濃厚であつた。而して戦前戦後に亘つて労働運動と云へば益々社會民主主義化して其運動はより多く階級闘争的に又革命的になつて來たのである。換言すれば労働運動を階級闘争化する事に於いて、マルクスの主義は勝を占めつゝあつた。ゾムバルト曰く、之れは惡の善用と考へられた。階級闘争と云ふ事は悪い事である。併し之れに依るに非ざれば、人類の眞の向上發展は出來ないと考へて居つた。此の善なる目的のために階級闘争なる惡手段を用ひるも已むを得ずとした。マルクスは惡の善用の福音を傳へるものと考へられて居つた。其の極一方に偏したものである事を免れない。惡の善用と云ふ事に熱中する餘り惡の悪用のある事を忘れた。即ち善なる結果と云ふ事には重きが置かれずして惡なる手段の過重と云ふ事が強くなつて來た。ゾルバルトは斷言して『然るが故に社會主義は創造力建設力の乏しいものとなつた。戦後の世界は其有力なる證據である』と云つて居る。ゾムバルトは曰く『惡の悪用のみが行はれるが故に今世界を支配するものは破壊と憎惡とのみである。今の世界に於けるほど憎まるゝ事の多くして愛せらるゝ事の少ない世界はない。所謂革命の内容を検すれば、たゞ無制限な

る拜金主義が至る所に支配して居るのを見るのみである』と。

此の立場からして、ゾムバルトは會つては其の『社會主義と社會運動』と云ふ本に於いて、マルクス主義即ち社會民主主義のみを社會主義と認めて研究の題目として居つた。然るに最近刊行にかゝる『社會主義の基礎及び批評』と云ふ編纂書の序文に於ては、マルクス主義は虚偽なる社會主義(ブソイドソチアリズム)であると明言して居る。同一の著者から斯くも矛盾した言を聞くのは甚だ奇異の感を覺ゆるけれども、ゾムバルトの様に現實の運動をとつて研究の題材とする以上は、現實の變化はやがて判斷の變化を惹き起す事は、寧ろ當然であると言はなければならぬ。

私はゾムバルトの右の書が出版される前屢々社會民主主義は虚偽なるデモクラシーであるとの斷言して、河上博士はじめ日本の社會主義の甚しい怒を招いた。併し乍ら河上博士其他の人々にして、社會主義研究者中の白眉と云はるゝゾムバルトが社會民主主義を虚偽なる社會主義と斷言したと云ふ事を聞かれたならば、果して何んと言はるゝであらうか。私の好奇心を起す事を禁じ得ざる所である。況んやロシアのボルシエヴキ

の事を考へて見れば社會民主主義は虚偽なるデモクラシーであり、ゾムバルトの言葉を以て言へば虚偽なる社會主義であると云ふ事が一層痛切に感ぜられる。社會民主主義とボルシェエウキズムとの關係異同に就いては拙著『ボルシェエウキズム研究』(本全集第五集收録)を見て頂きたい。

ゾムバルトは虚偽なる社會主義と斷言したけれども、つい此の間までは社會民主主義を以て殆んど唯一の社會主義と認めて居つたのは現實的解釋をとれば決して間違つた事ではない。現實的解釋を執る立場に立てば社會主義と云ふものは唯物史觀に基く所のマルクスの社會進化論と其の實現の手段たる階級闘争と云ふことが其の本質を形成するものと言はなければならぬ。若し野依君の發した質問が此の現實的社會主義を是認するか否認するかといふのならば、之れに對する答は二様に分けねばならぬ。即ち(第一)マルクスの社會進化學説は學問上に於いて大いに採るべき點もあり、また捨つべき點もあると答へなければならぬ。すべての學説に對する場合の如く、無批判的な是認否認は此の場合にも出來ない。而して現成の事實として今日の勞働運動を一の階級闘争であると認める其の見解は事實論としては全く正しいのである。(第二)に野依君の

質問が勞働運動を何處までも常に單に一の階級闘争たらしむ可し否正さに左様せねばならぬものであるとの社會民主主義の主張を是とするか非とするかと云ふのならば、私は斷然之れを否認すと答へる。之は私が久しい以前から主張して居る所である。社會主義を是認すると云ふ人々が若し此の現實的解釋に従つて答へたのならば、其の人々は階級闘争の存在と永續とを是認したのでなければならぬ。

若しさうでなくして社會主義を是認すると答へたとすれば、それは次ぎに説く所の綜合的解釋をとるものであるか、然らざれば現實的解釋をとつて、而して誤謬に陥つて居るものと言はなければならぬ。『實業之世界』に掲げられた所の諸名家の回答を通讀するに殆んど一つの除外例なく、此の點が明白になつて居ない。否、我はマルキシストとなりと明言せらるゝ人々の内でも階級闘争を是認するか否認するかを曖昧に付して居るものもある。例へば最も有力なる代表者を擧げて見れば、河上博士はそれである。同博士は會つて私を攻撃せられた論文中に『尤も日本の現在では階級闘争を是とする論者に其思想を發表するだけの自由はあるまいけれど!』と云つて居られる。其意味は

恐らく博士自らは階級闘争を是認せらるゝけれども、日本の現在では其の是とする主張を發表するだけの自由がないから黙して居ると云ふにあるだらう。之れは甚だ曖昧な態度と言はなければならぬ。學問上階級闘争を是とせらるゝ以上、一の學說として之れを發表せらるゝ事は、學者として當に爲さなければならぬ所である。其點を曖昧に附するのは甚だ人を迷はすものと云はなければならぬ。河上博士は私を難じて『福田は階級闘争と云ふ一の方法を以て、即ち社會民主主義なりと稱し、斯くて社會民主主義を以て勞働階級のみをクラシーを要求するものとなし、従つて之れを以て虚偽のデモクラシーとなし、遂に眞正なるデモクラシーの權威を以て之れに對抗せしが故に、我等（博士を言ふ）の如きものは其の眞意を捕捉するに迷つて、實は甚だ哀れなる次第である』と言つて居られる。併し乍ら、一切の勞働運動社會運動を階級闘争と云ふ方法によつて、其社會的理想に結び付くことが社會民主主義であつて、此の結付けを度外しては社會民主主義なるものゝ成立たない事は、世界周知の事實である。其の事はマルキシスト自ら之れを認め、またゾムバルトの如きは、其の著書に於いて明白に斷言して居る所である。否、

然るが故にゾムバルトは、社會民主主義を以て虚偽なる社會主義なりと斷定して居るのである。

四

私は今社會主義評論をするのではないから、是れ以上立入つて論じない。たゞ今日の世界の行き詰りの一大原因は、一方にはゾムバルトの所謂拜金主義、私の所謂資本的侵略主義が戦後益々露骨となり、他方には之れに對抗する勞働運動が著しく階級闘争的となつて來たこと、之れである所以を指摘せんとするものである。

現實の運動たる社會民主主義並に其の徹底化なりと自から稱して居る所のボルシェヴィキズムが、あらゆる勞働運動を蔽ひ去つて、一切の社會主義運動を擧げて階級闘争化しつゝあると云ふ事は、資本的侵略主義に對する反對毒としては甚だ有効であり有力ではあるが、眞の意味に於ける世界改造人類の解放は、之れが爲めに非常に妨げられて居るのである。

行き詰つた世界を救ふ第一着手は、世界を階級的鬭争思想並に運動から解放すること
 之でなければならぬと私は信ずる。換言すれば、ゾムバルトの所謂虚偽の社會主義から
 世界を解放しなければならぬ。ゾムバルトは其の『社會主義と社會運動』の最新版（一
 九一九年第八版）の序文中、次ぎの如く云つて居る。

『次ぎの世紀の生活形態たる社會主義に與ふるに、之れを高潔ならしめ、其の精神によつて
 一の新しき、より高き文化紀元を決定する力を與ふべき内容を以てする事は、將來の問題で
 ある。若し予の見る所にして謬りなくんば、一千九百十七年並に其後に於ける諸革命は、マ
 ルクス派社會主義の完成を意味すると同時に、其の終末を意味するものである。マルクス
 派社會主義の使命は經濟形態のみならず、精神形態の改造、新建築物を打立つべき地均しをす
 る事であつたのである』

私も大體に於いて斯く觀察するものであるが、併しそれと共にマルキシズムは、地均しを
 すると共に、幾多の防害物をも残して行つたものであると思ふ。其の意味は、社會の改造
 は今日から明日へと突飛に行はるゝものではない。所謂自然は飛躍せず。(Natura non
 facit saltum) と云ひ、またヘーコンの名言である所の『自然を制せんと欲するものは先

づ之れに服従せざるべからず』(Nature to be commanded, must be obeyed) と云ふ道理を社
 會發展の上に應用した事は、私を以て見れば偉大なる地均し工事であつた。マルクスが
 一千八百七十四年の頃、ブルドーン、バクレーン等の無政府主義者と戦つたのは、此の點
 に於て大なる意味をもつて居る。無政府主義者は其の理論の即時的實現を主張するも
 のである。マルクスは之れに對して進化的發展の立場を力説した。之れ前段にマルク
 ス主義には革命的方面と共に進化的方面があると云つた所以である。此の進化的方面
 は社會改造上に於ける空前絶後とも言ふべき大なる地ならし工事であつて、同時にまた
 マルキシズムを以つて科學的研究の上に堅固なる地盤を有するものたらしめたのであ
 る。此の社會進化論に比ぶれば、クロボトキンの相互扶助論の如きは學問上甚だ哀れな
 ものである。彼れの歴史的考證は今日の學問から見れば誤謬だらけのものである。尤
 もマルキシズムの歴史的研究にも重大なる缺陷がある。就中エンゲルスの國家起源論
 の如きは、今日の學問の研究の結果から言へば、探るべきは極めて僅かであつて捨つべき
 は甚だ多い。沈んやラフアルズの財産起源論の如きは、クロボトキンの相互扶助論より

も更らに劣る、學問的價值甚だ少ないものである。併し乍ら、マルキシズムの社會進化論、特にマルクスの説いた社會進化學説は、是等の個々の研究が學問上打破せられたからと云つて、毫も其の影響を受くるものではない。何となれば其の眞價値は、歴史的事實の考證の内容にあるのではなくして、其の研究法の上にあるからである。マルクスが説いた社會進化の道行きに就いては、學問上是認すべきものもあれば否認すべきものもある。併し問題はそこにあるのではない。人類の解放は、自然的進化の道程に於いてのみ得らるべく、急激なる人爲的方略によつて實現せらるべきものでないと云ふ事、其が私の名づけて大なる地均し工事と云ふ所のものである。反對に私がマルクスの事業は、地均しをすと共に、幾多の妨害物を遺留したと云ふのは、彼の説の革命的方面是れである。今日此の妨害物が蔓こつて居る、戦後に於いてあらゆる勞働運動が著しく革命的色彩を濃くした事は、即ち人類解放の上に大なる妨害となつて居るのである。

五

以上は、現實的解釋に従つた社會主義即ち社會民主主義に就いて簡単に陳述した所であるが、此の現實的解釋を以てすれば、古より今日に至るまでの社會主義的思想及び運動中、洩るゝものが澤山出て来る。ギリシアのプラトーンからはじめて、カンパネラ、フイヒテ、サンシモン、ブリエー等は、何れも其中に入らない事になる。否、ラサルレすらも、嚴密に言へば其の中に入らない。ゾムバルトは此の點を指摘して、其の最近刊行書中に於いては、會つて探つた現實的解釋を捨て、綜合的解釋を採つて居る。之れは一見矛盾して居る様であるが、實はさうでない。現在の問題としては、階級闘争と其の理論的根柢たる一種の社會進化説は、社會主義から切つても切る事の出来ないものであるが、昔より今日に至る一切の社會主義的思想と運動とを總攬しようとなれば、さうではなくなつて来る。否、現在の問題としても、例へば英國のギルド、ソシアリズムの如きは、嚴密なる現實的解釋に従つての社會主義の中には入る事は出来ない。故に近來に至つて英國のギルド社會主義者と云ふ名を好まなくなつた。單にナショナルギルドと稱せんとし、自ら名づけてギルド社會主義者と云はずしてギルドメンと云つて居る。

一切の社會主義的思想運動を總括すべき綜合的解釋はゾムバルトに従へば營利主義を否認する所の實際的社會合理主義(ソチアールラチヨナリスチック)是れである。ゾムバルトは曰く、

『社會主義とは人類社會に於いて正義の理想を實現する爲めの理性的努力を言ひ、而して此の目的を達するには營利經濟を廢して、之れに代ゆるに非營利經濟を以てする外はないとするものである。或は私有制度を攻撃し或は貨幣廢止を主張し、或は貧富の對抗を非難するは、畢竟するに營利主義を攻撃する所以であつて、それを様々の異つた形に於いて言ひ現はすに外ならぬ』。

或る人は貨幣廢止によつて營利經濟を廢止し得べしとする、例へば近頃我邦で貨幣廢止論を熱心に主張する川島清次郎氏の如き正にそれである。川島氏の如きは單に貨幣を廢止して止むと云ふのではない。之れによつて營利主義を一掃しようと云ふのである。ゾムバルトの定義に従へば、川島清次郎氏は確に一の社會主義者である。或人は又私有財産を廢し若しくは制限する事によつて營利主義を根絶し得べしとする。其説く所は概々であるが目的とする所は人類社會の非營利化と云ふ事である。バートランドラッ

セルの如きも所有衝動を抑へ、創造衝動を揚げようと主張して居る點に於て、確に一の社會主義者である。ギルド・ソシアリズムも此意味に於ては確に一の社會主義である。社會政策を主張する人の中でも、營利主義を全然否認する人は、名は社會政策であるが、實は社會主義をとるものと云はなければならぬ。而して此の解釋に従ふ社會主義にも、亦革命的と進化的との區別がある。今直ちに營利主義を全廢すべしと主張するのは、革命的の色彩を帯びるを免れない。之れに反して社會進化の道程上營利主義の全滅する日のある事を信じ、其の促進の爲めに力を用ひんとするものは、進化的若しくは漸進的論者である。此の派にも亦二つの小區分がある。其の促進に非常に重きを置くものと、促進の可能性若しくは其の効力に餘り重きを置かず、社會文化の發展に重きを置くものとである。其の最後の意味に解すれば、世に社會主義者の數は非常に多い事にならなければならぬ。何となれば、營利主義を以て萬代不易と信ずるが如きは、人類社會の進化を頭から否定すると同じ事であるからである。

ゾムバルトは營利主義の起源は極めて新しい事を認めて、有名な其著『近代資本主義

論』を作つたが歴史的研究の結果から言へば確に幾多の誤がある（ブレンタノ先生の
新著『資本主義の起源』其他を見よ）。ゾムバルト自身も右大著の最新版に於ては著しく
説き方を變へて居る。歴史研究の結果から言へば營利主義の起源は餘程古い。従つて
其消滅にもまた長い時間を要するは社會進化論を認める者としては到底之れを争ふ事
を得ない。人類にして生れ變らざる限り、其の經濟文明の向後の發達に於いて猶暫らく
は營利主義を全然取り去る事は期待され得ざる事である。我々の立場から見れば問題
は營利主義の全滅ではなくして、其の向上發展である。資本的侵略主義は營利主義の悪
化である。一の病態である。決して其の必然の現象ではないと私共は信ずる。資本的
侵略主義は營利主義のみから來たのではなく、營利主義に加ふるに征服慾を以てしたも
のである。決して其の自然的發展と見なす事の出来るものではない。

六

ゾムバルトは『マルクスの社會進化論は社會主義に何んの關係が無いものである。』

其の社會進化學説を認めた所で社會主義を認める譯ではないし社會主義を採ると云つ
たとて、マルクスの社會進化論學説を認めなければならぬ理由はない。何となればそれ
は一つの學説である。其の採否はたゞ學問上に於いてのみ決定せらるべき事である』
と云ひ、また『マルクスは社會主義に寄與する所は一つもない。マルキシストが社會主
義者であるのは彼がマルキシストであるからではなくして、外の理由からであらねばな
らぬ。プロレタリアの解放運動を社會主義とする事は社會主義を虚偽ならしめて居る。
プロレタリアの階級的利益と云ふ事は社會主義にとつて風馬牛である事、ブルジョアの
階級的利益と同じ事である。プロレタリア解放運動として現に行はるゝ各種の悪事は
社會主義の悪事ではない。今日プロレタリアを指導する精神は社會主義でないのみな
らず、寧ろ社會主義の反對である』と主張して居る。若し此の説が正しいものであるな
らば我々にとつての問題は社會主義をプロレタリアの階級的利益から解放する事では
なければならぬ。換言すれば、社會主義運動をプロレタリア運動から引き離すと云ふ事は
れであらねばならぬ。

私が今や世界を救かすものは、二つの虚偽なるデモクラシーで、一つは資本的侵略主義の假面たる英米的の政治的デモクラシーであつて、二はプロレタリア專制のソシアリズムデモクラシーであると思ふ。此意味において輕卒なる學者が『労働者の天下』と云ふ警語を振りまわすのは甚だ誤つた事である。人類の解放の眞の要求は、天下を誰人の天下にもしない事である。天下を金持の天下にしない如く、貧乏人の天下にもしない事である。『ブルジョアの天下』と云ふ事の都合なるが如く、『労働者の天下』と云ふ事も亦不都合である。共に斷乎として排斥しなければならぬ。行き詰まつた世界を救ふ第一着手は、世界をして資本家の天下たらしめねばならぬと共に世界をして労働者の天下たらしめざる事にあらねばならぬ。之れが世界の展開の第一段であると信ずる。言葉を換へて言へば階級闘争を根本信條とするマルキシズムから解放せられねばならぬ。併しそれはマルキシズム全體の否認と混同してはならぬ。況んや綜合的解釋に従ふ社會主義の全部的否認と混同すべきではない。

望伏高信君は曾つて私を罵つて彼は資本主義の擁護者であると言はれた。斯く言はるゝ望伏君の資本主義とは何物を指すのであるか。否、世間の論者が資本主義資本主義と云ふ其の資本主義とは抑も何を指して言ふのであるか其の内容は甚だ曖昧なものである。若し望伏君の意にして福田は營利主義を是認するものであると云ふにあるならば私は隨んで其の非難を甘受する。併し乍ら私は決して營利主義の擁護者ではない。私は如何なる主義をも擁護はしない。私は只事實を事實として認むるのみである。今日の世界に於いて營利主義全部を否認して果して何が出来るか。世界は營利主義によつて活動しつゝあるのである。擁護するもせざるも、世界はそれに頓着なく進んで行く。併し乍ら營利主義は人類と共に不朽なるべしとするが如きは社會進化を認むる者にとつて到底あり得べからざる事である。併し乍らそれと同時に今日の營利主義の發動に重大なる弊害と缺陷の存する事は十分認めて居る。然るが故に、社會政策を主張するのである。併し社會政策は營利主義の濫用に極力對抗すると共に、虚偽のデモクラシーたる階級闘争主義の濫用に對しても、又た極力奮闘しなければならぬものである。

七

私が今問題とする所は行き詰まつた世界の展開であつて、社會主義、社會民主主義の評論ではない。世界の局面展開と云ふ點から見て、人類の眞正なる解放に進まうとするには、ひとり實際運動の上のみに眼を局限してはならぬ。思想の分野にも着眼しなければならぬ。以下其の點に關して少しく論じて見よう。

抑も社會民主主義、マルキシズムが現實の運動のみならず、現實の思想を斯く迄支配するに至つたには種々なる原因がある。今之れを詳論する積りはないが、私の一大原因と信ずるものを舉ぐれば、ヨーロッパの生活と思想とが餘りに深く自然科学化した事である。其の結果ヨーロッパの思想は著しく唯物的、物質的、數量的、客觀的になつた。近世に於ける自然科学の發達は偉大である。之れに對しては、文化科學精神科學は殆んど顔色なき有様であつた。ラッセルは之れを異つた言葉を以て、近代は餘りに多く欲望の生活となり衝動を輕んずるに至つたと言つて居る。ゾムバルトは會つて、現代の生活は

悉く量化したと言つて居る。此の趨勢に對して、文化科學精神科學の方面から抗議をしたものが様々あるが、今日に於て最も有力な抗議者は所謂西南ドイツ派と云はるゝ新カント派の哲學之れである。リツカートは其の名著『自然科学的概念設定の限界』を著して其の學派の代表者となつた。我邦に於いては、左右田喜一郎博士が文化主義と云ふ標榜の下に、リツカートと略同様の説を述べられた。桑木殿翼博士も文化主義を唱へて居られる。今文化主義の批評をする積りはないが、私は自然科学一點張りよりの解放の試としては、ヴギンデルバンド、リツカート以下の新カント派の學者は確に成功したものと考へる。

併し乍ら、積極的主張としての文化主義が果して行き詰まつた世界改造の原理の一として決定的の力を有するか否かに就ては、私は多大の疑ひを有して居るものである。ゾムバルトの言ふ如く、マルキシズムが社會主義運動の上に於いて地均しをしたものであると似たならば、西南ドイツ派の努力は文化思想上に偉大なる地均しをなしたものと云ひ得る。併し地均しは建設其物ではない。行き詰まつた世界を救ふべき力はドイツ

より來ると私の言つた中には、マルキシズムの地均し事業新カント派の地均し事業も入つて居る。此の點までは、西南ドイツ學派の力を認めるが、ゾムバルトが向後の社會改造の原理としてマルキシズムは既に終末を告げたと云つて居るが如く、私はまた同じ言葉を用ゐて、カントの哲學も或る意味に於いて終末を告げつゝありと言はんと欲するものである。

ヒュームがイギリスの産物であり、ルソーがフランスの産物であつたと云ふのとは同じ意味では言へないが、カントは確に十八世紀から十九世紀にかけてのドイツ文明の産物である。若し極端に言ふ事を許されるならば、此度の戦争に方つて、英米の論者がドイツの軍國主義を非難した其の非難は、極めて僅かではあるが、カントに加へらるべきではあるまいか。此考はフランスの哲學者ブートルーも其『戦争と哲學』中に唱へた所であるが、ブートルー論には、ドイツ憎しと云ふ念が大分強く働いてゐるので、従つて公平な見解とは考へられない。併しカント流のリゴリズム（假りに嚴格主義と譯して置かう）カントの『アプリアリ』の考へは、極く僅かではあるが、非難せられた所の軍國主義帝國主

義の色彩を帯びて居るものではないか。戦争の始、ドイツの學者が連署して世界の識者に訴へた宣言中に、ドイツの文化と云ふことを高唱したに對して、聯合國の學者は、其のクルトウールなるものは、軍國主義の色彩を帯ぶと難じた。ブートルーは特に之を極論した。私は其の論を僻論と認むるものであるが、併し所謂文化主義文化生活等の文化には、多少の非難を辭し難き一種のドイツ臭を帯びて居るものではないかと疑ふものである。少なくとも今日所謂文化主義に現はれた所のものは、一つの『エリット』主義であり、強者主義であり、優者主義である様に思ふ。従つて眞正のデモクラシーの哲學とは考へ難いのである。無論デモクラシーが悪平等を主張するならば、文化主義の立場から非難する事は當然であらう。併し乍ら思想の傾向の上になつて文化主義には非デモクラチックな流れはありはしないかと云ふ事を疑ふものである。但しこれは或は私の誤解に基くかも知れない。私が今此所に言はんとする所は、一切の内容制約を許さない所の『アプリアリ』を以て嚮導概念となすべしと云ふ主張は、果して向後の世界の思想を導く力があるか如何と云ふ事は是れである。此の點に於いて私は端なく今學界に大問題となつて

居る所のアルベルトアインシュタイン教授の相對説に思ひ到らざるを得ない。

八

アインシュタインの相對説(レラチヴィタティーツネオリー)に就いてはフロインドリツとの言ふ所を暫く聞いて見よう。氏曰く『ニュートンは二つの物體を見た所では互に關係がないこと、天體間の場合の如きに於ても、互に影響し合ふものであつて、其の影響は各物體の積に正比例し、物體間の距離の平方に反比例する所の力を以て互に引き合ふものであると云ふ、單純にして有力なる法則を立てた。然るにホイゲンズとライブニツチとは此法則の妥當性を認める事を拒んだ。曰く『此法則は總ての物理的法則が服従せねばならぬ所の一つの根本條件を缺いて居る。即ちコンチニユイチ(接續性)を缺いて居る。ニュートンの法則に従へば、二つの法則が何等かの仲介物なくして、互に力を他に移し合ふものとせられて居る兩者の間には接續性が無い』と。そこで此缺陷を滿たすべき必要が迫つて來た結果、二つの物體の間にはエーテルと云ふすべての物體の間に

入り込むものがあつてこれが力を傳達するものである。エーテルは永久に人間の感知し得ない所の見えざる働能はざる所のものとされて居つた。然るに其を以ては満足が出来なくなつて物理的法則を打立てるには、現實に觀察し得る所の因果關係にあるものにのみ限らなければならぬと言はれ、エーテルの介在と云ふことに満足が出来なくなつて來た。此缺陷を滿たすべく打立てられたものがアインシュタインの相對説である。アインシュタインによれば、觀察し得る事と接續し得る事とは兩立し得るのである。之が彼の大發見たる所以である。即ち物理的法則は、遠くにある力と云ふ考を全然捨て、相互に接觸してゐるもの間のみ、そして其總てが觀察の範圍内にある限りに於て、其因果關係を説明すべしと云ふ二の要求を結びつける事が出来るやうになつた』(『アインシュタイン引力説の根柢』第二節)。

アインシュタイン自ら其新發見に就て語つて云ふ、『予の主張する相對説とは時間と空間とに關して云ふものである。ガリレオとニュートンに従へば、時間と空間とは絶對的の全體であつて、宇宙の運動體系は此絶對的な時間と空間との上に繋がれて居るもの

である。力學は此の考への上に建てられてあつた。それより生ずる定式は緩慢性の運動に就ては凡て十分であつた。さり乍ら迅速な運動殊に電氣動學に於ける迅速運動には一致しないことが見出された。之れがオランダの學者ロレンツ氏並に予をして特殊相對説を考へ出さしむるに至つた所以である。此説は簡単に云へば絶対的なる時間及空間を否認し兩者を以て凡ての瞬間に於て運動體系に相對的なるものと認むるのである。此説によつて従來の定式によつて説明し得られなかつた電氣動學並に力學に於ける一切の現象は——其れは甚だ多い——満足なる解釋を得るのである。今迄は時間と空間とは其以外何物もなく——太陽もなく地球もなく星もなくとも——其自ら獨立して存在するものと考へられて居た。然るに我々は今は時間と空間とは宇宙に向ての容器ではなく却つて内容たる太陽地球其他の天體なくしては時間も空間も決して存在するものでない事を知るに至つたのである』と。而して彼の同勞學者たるオランダのライデン大學教授ロレンツは其同勞學者たるアインシュタインを賞讃して『アインシュタインの學績の結果物理學をして（善き意味に於て）より哲學的たらしめたにあ

る。彼は今日専門分割と部分知識の發達の爲に掩はれて仕舞つた十七、十八世紀の偉大なる諸學說に見る所の理智的統一のあるものを再び回復した。或る意味にて今日は我々に取つて住むべく善き時代ではない。然し乍ら物理學に興味を有するものに取つては、（アインシュタインの發見以來）實に大なる慰みがある』と。彼又曰く『數世紀に亘つて、ニュートンの引力説は自然科學學說の最も顯著なる例であつた。其根本思想の單純なるが、即ち二物體間の引力は其積に比例し其距離の二乗に反比例すと云ふこと其説が太陽系を成す諸物體の運動を説明して十分なること、而てし甚だ遠隔せる星體系の場合にも行はる如き其の普遍妥當なることによつて、凡ての人の歡美する所であつた。乍ら數學者等が之より生ずる結果を精密に計算するに熟練を用いたにも拘らず、引力學に於ては、一も眞なる進歩は成されなかつた。……電氣作用に於て物體間に置かれたる物質によつて作用さるゝ影響は迅かに觀察され得るに拘らず、引力の場合に於て、中間物質によつて作用さるゝ影響は、其の形跡をだも發見することが出来なかつた。其れは我々の達し得ざる而して變化せざるもの、自然哲學の他の現象と一見何等の關係なきもの

として殘留して居た。アインシュタインは實に此孤立を撤去したのである。而して彼が引力は物質に作用するのみならず、光線にも作用することを明かにした』云々。又た『アインシュタインの業績は、吾人は期待し得る——科學の一記念碑として殘るであらう。彼の説は吾人が爲し得る第一の而して重要な要求を完全に充すものである。即ち現象の行程を或る原則から精密に而して最小の微點に至る迄演繹し得ること之れである。彼がエーテルの假定を斥けたことは慥かに幸なことであつた。彼が若しさうしなかつたならば、彼は彼の研究の根柢を爲す思想に達することは、恐らく出來なかつたであらう』云々（以上『アインシュタインの相對説に就て』より抄出す）。

ハローは云ふ『アインシュタインの宇宙觀がニュートンの其れに勝るものなることは、彼の相對律はニュートン法則の説明する一切のものを説明し得、更にニュートン法則の説明し得ざるものをも説明し得るによつて證明せらる』と、『ニュートンよりアインシュタインへ宇宙觀の變遷』。

要言すれば、アインシュタインの新發見は、物理界からエーテルと云ふ不可思議なもの

を全然驅逐したのである。見ることも實驗する事も出來ないエーテルの假定なくして、物體の引力を説明するのがアインシュタインの説である。而してこの立場から彼は又空間と時間と云ふものは、獨立して絶對的のものでなくして、相伴ふ相對的のものであり、空間を離れて時間は考へられず、時間を離れて空間は考へられないとし、又た空間の三次元ジョンに時間なる第四の次元ジョンを加ふ可しとするので、我々の世界觀の上に絶大なる擴張を持來したものである。英國の大學者ローヤルサイエー會長ジェータムソンはアインシュタインの功業を賞揚して『是れニュートン以來引力説に就て得られたる最重要の結果である。アインシュタインの立論は人類思想の最高業績の一である』と云つてゐる。又たブランクは、一千九百五年アインシュタインが初めて其説を發表した時に、既に斷言して云ふ『此説は其の大膽さに於ては、推理的自然哲學に於て、否哲學上の認識論に於てすら、今迄提示された一切の説に勝るものである。此の説によつて世界の物理觀に持來された革命は、其の廣さと深さとに於いて比較し得るものは、獨りコペルニクス説あるのみ』と。

世界文化の敵と云はれたドイツから此の新學説が出て敵國學者の巨頭をして其の足下に跪ぐかしむるに至つた事は我々に深い感慨と大なる痛快とを覚えしめる。萬國學士會はドイツは文化の敵であるが故に、ドイツの學界とは學問上實際をしないと決議し、日本なども雜魚のとも交りに此決議に加はつて居る。然るに戰爭中に於けるあらゆる學問を通じて最大發見たるアインシュタインの此新理論は、世界の學界から疏外されたドイツから起つて來た（但しアインシュタインが始めて其研究を公けにしたのは戰前千九百五年頃の事であつたが之を大成したのは戰時中即ち千九百十六年である）。日本などが之と學問上の實際をするのしないのなどと云ふ事は誠に以て片腹痛い事と言はなければならぬ。其人々にはアインシュタインの新説に接して能く穴にもぐり込まずに居られると言ひたい。尤も我邦の學者でもアインシュタインの此説は勿論彼と同時に此種類の研究をして居られた人は無論少からずあつた様である。併し新理論の大成は獨逸ウルム生れのユデア人にして伯林のカイザールヘルム研究所員（今はプロイセン學士院會員として伯林大學の講師をして居る）たる本年僅か四十二歳の壯年學者（千八百七十九年三月十四日生れ）の手によつて成された。

九

此の新發見はあらゆる自然科学の根本的大改造を促すものであるがそれは私の専門外であるからこゝに言ふべき限りではないが哲學及び社會諸學の上にも他日必ず甚大なる影響を及ぼす事と確信して居る。それは他日論ずることとして茲に私の喜びに堪えない事はアインシュタインの新説はエーテルの假定を一掃して總ての觀察し得る限りに於いて實驗的實證的の因果の法則のみを認めることに成功したと云ふ點是れである。カント哲學並に此頃流行の文化主義哲學に於ける從來の『アプリオリ』認識論の『アレン』は或は物理學の或るアプリオリから假定されたエーテルと其運命を同じくするものでなからうか。自然科学に於ける實驗的實證的研究の這箇の大勝利は總て哲學社會科學殊に經濟學に於る實證研究の復興を意味す可きものではあるまいか。今日迄の哲學の立場に於いて『アプリオリ』のゾレンと云ふ假定なくしては認識論は打立て

られないとする事は、エーテルの假定なくしては、引力の法則従つて總ての物理的法則が打立てられないとした如くではあるまいか。エーテルを物理界から驅逐するに成功した我々人類は、更に哲學上に於いて従來のアプリオリ認識論を驅逐する事に成功し得ないであらうか。是れが私が多大の期待を以て向後哲學の發達を見つゝある所以である。而して同時に經濟學に及す可き其作用を鶴首して待つものである。社會進化の説明に於いて例へば左右田博士は社會政策の歸趣と云ふ論文(同博士著『經濟哲學の諸問題』に收めあり)に於いて社會政策にも亦アプリオリたるゾレンなかるべからずと主張して居られるが我々の實驗を超越し、全然非實證的に一切の觀察を拒み、何等の内容を容るゝ事を許さないゾレンなくしては、社會政策が立たないものであらうか。之れに對して私は豫ねてより大いなる疑を有つて居るものである。

社會進化の研究に哲學が無くてはならぬ事は、久しい以前より私の主張する所である。今日の社會政策は哲學を缺いて居る。私は社會政策に哲學を與へる事に努めなければならぬと思ふ。社會運動には哲學が無ければならぬ、労働運動にも哲學が無ければならぬ。

ぬ。併し乍ら其哲學にして若し超越的先驗的にして絶對的なる「アプリオリ」を規範とするものでなければならぬ、全然非實證的でなければならぬとするならば、我々は今絶望の深淵に望むものと言はなければならぬ。世界の行詰まりを救ふべく我々は先づ文化主義に歸依して、其ゾレンの嚮導を待たねばならぬとするならば、少くとも現在の所我々は全然適從する所を知らない。乍併し物理界からエーテルを取り除く事が出来た如くに精神界から此絶對的にして全く經驗から獨立して居ると云ふゾレンを取り除く事が出来たとしたならば、我々は如何に自由に如何に快活に社會改造の思索に耽る事が出来ようぞ。ロレンツの言ふが如く住むにより、悪くなつた今日に於て、如何に大なる慰藉と刺戟とを見出し得ようぞ。私はゾレン哲學からの解放、而して其意味に於て、カント哲學からの解放は、哲學方面思想方面に於る一の大なる展開を意味するものではないかと考へる者である。此意味に於て私共はマルクスから其階級闘争論から解放せらるゝ爲には社會思想の上に於る、アインシュタインの起るを待つ事誠に切なるものである。

|| 大正九年十二月『實業之世界』掲載 ||

附 考

石原左右田兩博士の所論に就て

私が右の論文を公けにしたのは大正九年十二月の『實業之世界』誌上であつた。トモ
が其翌月即ち大正十年一月號の同じ雜誌に、我邦に於るアインシュタイン研究の最高
權威である石原純博士は『福田博士の所謂アツプリアリの否定といふことに就て』と題
して可なり長い一論文を寄せられて、私の言葉の足らない所を指摘し諄々として教へら
るゝ所があつた。私は博士の芳情に對し深厚の謝意を表せずには居られない。私の書
き様の拙なる爲め、否、抑も私の知識の淺薄なる爲め、私が一切の意味に於けるアプリアリ
を否定するものであるように解せられたは甚だ汗顔に堪へない所である。私の言は

とする所は、カント哲學に於けるアプリアリ命題、殊に左右田博士等の主張せらるゝ何等
の内容的制約を許さない先天的條件規範絕對普遍妥當的形式としてのゾレンと云ふ意
味にてのアプリアリからの解放と云ふ一事であつた。我々の思索から、一切アプリアリ
を排斥するなど云ふことの考へ得可きでないことは、私は事餘りに當然なりと考へて
別に何とも言はなかつたのである。尤も石原博士も（A）『福田博士が哲學からアプ
リアリを驅逐することによりて、其發達を期待したいと言はれる本當の意味を、私は解して
ゐるのか如何かを知りませんけれども、哲學及一般の科學の本質を深く考へて行つたな
ら、アツプリアリの全否定といふことは不可能であるのではないかと私は想ひます。そ
れは主義的に科學このものゝ否定を結果するに違ひないと思ふからです。福田博士の
眞意は勿論そんなことではないのでせう。私は博士と共にアインシュタインの仕事を
引いて、私たちの理論に入つてゐるアツプリアリの内容が絶対のものではなくて、之れは
いつも或る批判にのぼせられなければならぬものであることを覺醒させたいと思ひま
す。併し其の内容が變更されたときに、やはり其適切な形に於てアツプリアリは存在す

るのであることを認めなければなりません。』(B)『此意味に於て私自からはカント哲學からの解放を肯定し得ないのであり、之のアプリアリを承認してゐるのであるとするならば、それは現在の私にとつて之に反する理由を見出し得ないからであるに外ないので。さうして私は前節の終にいつた言をこゝに繰返す必要を認めるのです。原理の絶対性を疑ふ可能を、私たちは自分の進發の爲に準備しておかなくてはなりませんけれども、此の懷疑は必然なる理由なしに徒らに放漫に申し出されてはならないのです。どれだけ普遍的に之れが價値づけられてゐるか、省みられなければならぬと私は思ひます。』同誌一四頁第五節と云つて居られる。此一節を私は便宜の爲めに(A)(B)の二節に分けた。(A)節に於て石原博士の言はるゝことは、全く私の言はんとする所其儘である。それに異り、(B)節に於て博士の言はれる所には、私は多大の疑を抱かざるを得ないのである。

二

私は石原博士と共に『私たちの理論に入つてゐるアプリアリの内容が絶対のものではなく、之は何時も或る批判にのぼせられなければならぬものであることを覺醒させたいと思ふ』からこそ、右の論文を認めたのである。無論『併しその内容が變更されたときに、やはりその適切な形に於てアプリアリは存在するものであることは認めなければなりません』と信ずるものである。私が内容制約を許さぬ先天的形式規範ソレンとしての意味のアプリアリからの解放を、アインシュタインのエーテルからの解放になぞらへて之を期待すると言ふのは、主として我邦に於る文化主義經濟哲學の主張者左右田博士の主張に就て考へて居ることなのである。左右田博士の内容無制約アプリアリ認識論は、實に猛烈を極めたものである。今其の『社會政策の歸趣』と云ふ一論文から若干例をあげて見よう。

『要するに、其のソレンに特定の内容を入れて考ふるときは、それからそれと必ず尙夫れ以上に之を制約するものあることを要するから、其の究極に押し詰めて行くと、其の特定の範圍に於ける認識の先天的條件たるソレンとしては、常に必ず形式的に終つて、何等内容の制約を許

さないと云ふことにならなければならぬ』(『經濟哲學の諸問題』岩波改刷版一三四頁)

『ソレンたる一般的文化價值に係はつて歴史生活其自らが認識論上に可能となり、此一般的文化價值に照らし合はされて價値判断のある處に認識成果たる歴史生活の價値が批判せられ茲に政策の根基が横はるのである……社會政策の根基は此くの如き先天的形式に係はつて始めて可能となりたる歴史生活の實際的價値判断に存すると言つて宜しいのである。

さうすると此の一般的文化價值と云ふ先天的規範であり、式でありソレンである所のものは、其之を可能ならしむる總ての根基であつて、歴史生活は要するに、此一般的文化價值を内容的に實現せんとする過程の一切であり、社會政策は斯くの如き文化價值の内容的實現に對する意識的故意的努力であると言ふて宜しいと思ふ。さうして此意味に於て歴史生活及び社會政策の歸趣としての究極點は、即ち一般的文化價值なる先天的規範の内容的實現それ自身であると云ふ可きである。茲に理想が湧き不斷の努力が起り人生の悠久がある。而して斯くの如くあらしむるものは偏に一般的文化價值が先天的形式であつて何等の内容的制約を許さぬと云ふ場合に於てのみ意義があるのである』(同上、一三七—一三八頁。)

『さう云ふ風に段々推し詰めて考へて見れば結局後天的經驗的の内容的制約を許さざる先天的形式規範としての一般的文化價值と云ふものが存在しなければならぬと思ふのである。……各論者は皆之れに一定の何等かの内容を付せられて居る如く私には思はれましたけれ

ども今以上の如く論じ來つた論法を用ゐて参りますれば、矢張り此の『社會政策』と云ふ文字の意味も段々問ひ詰めて行くと結局其の歸趣がソレンとして考へらるゝ場合には、總て先天的形式として何等内容的制約を許さない場合に於てのみ意義があると私は思ふのであります』(同上、一四〇頁。)

『斯くの如く何等の内容的制約を許さない先天的條件規範としての文化價值は歴史的生活を認識論的に可能ならしめ、政策に根基を與へ且其の兩者の歸趣を示すものである』(同上、一四二頁。)

『即ち經濟生活及び經濟政策の歸趣は之を繰返して申せば、規範實現の内容が、客觀的普遍的妥當性を有すべしとし又有する所である』(同上、一四三頁。)

『其の究極に於て規範實現の内容が客觀的普遍的妥當性を具有すべしとする、謂はゞ形而上學的妥當性と信念(信)とがあつて初めて規範實現の全過程に意義あり得るに至るものである。此の規範の内容が普遍的妥當性を具有すべしといふ要求は、規範其自身が既に吾等に必然的に起らざるを得ざる而かも到底解明する事を得ない問題であると云ふ意義と同じく、カントの用語例に従へば即ち一個の『イデー』であり一個の『レダクチャーヴェスプリンチップ』即ち統制的又は整理的原理を稱すべきものである……上述の規範の内容が普遍的妥當性を有すべしとするは、規範それ自身と同様、一個の整理的統制的原理なりと解する場合に於てのみ意

義があるのである。併しながら、普通の妥當性を有すべき内容の實現を規範に求むる處の、申せば形而上學的超認識論的信念(19)あつて、初めて人生の悠久に意義があり政策に根基が與入らるゝものである。(同上、一四四—五頁。)

『超經驗的實在を第一次的實在として此の經驗界の背後に求むる形而上學の許すべからざることを吾々は知り乍ら(19)尙且經濟的文化價値の内容實現に一切の時處を超えたる無制約的普遍的妥當を思はざるを得ざる處に經濟政策は其の根據と歸趣とを有するのである。茲にカントと共に、文化生活に客觀的意義を與ふるものとして且此の世界と其の歴史の意義目的を示すものとして、自由を擧ぐることを得べきや否やは、又經濟哲學が其自身の問題とする所でなければならぬ』(同上、一四六—七頁)

『經濟生活の意義歸趣を釋ぬる處に經濟哲學は其の最終の問題を有して居る。此の經濟哲學の究極の問題定まつて、初めて吾等は社會政策を語るべく社會政策を談ずべし。…竝に殆んど解明し得ざる經濟哲學上の難問が横はつて居ると云ふことを諸君に指示するに過ぎない』(同上、一四七—八頁。)

三

右に擧げたと同様の言は、左右田博士の著書論文の凡に亘つて何十回(或は何百回と云つても誤りではなからう)となく繰り返し〜述べられて居る。私は哲學に於いては全くの門外漢であるから、正面から博士の言に對して彼是批評をする資格を有たぬものであるが理論經濟學政策經濟學の立場から、右の言を聞く毎に、其の高度なる壓迫、其の絶對無上の威權に拗からず困惑を感じたもので、若し博士の言はるゝような内容無制約的な超經驗的形式的普遍妥當的先天要素としてのツレン、經濟的文化價値其を博士は貨幣に求めて居るのみが經濟學の存在を可能ならしめるもので、其れを認めない限りは經濟學は成立たず、經濟政策もあり得ないとすれば、經濟學なるものは——否、社會科學は一般に——逆も不可能なことゝなるのではないかとの疑惑を深くせざるを得なかつた。而して博士の主眼せられる様な經濟哲學のみが存在し得るものとなつたら、其は今日現在の經濟生活とは縁もゆかりもない一の論理學となるの外ないのではないかと思はざるを得なかつた。現に博士の經濟哲學は、現實の經濟生活の微小なる一部分をだに我々に向つて説明して呉れて居ないのである。實際の經濟現象は博士の經濟哲學によつて何等の解明を

も下されて居ない全く没交渉なものである。かくては畢竟事實上經濟學の否定と云ふ結果を産み出す事を物語るものではないかと惑はざるを得なかつた。殊に博士は私を以て排斥せざる可かざる心理主義經濟學なるものゝ一代表者として屢々戦を挑まれたが私の立場からは博士の大詰問に對して何と答へて宜しいか一向見當も付かなかつた。私は嘗てカントの國家及法律哲學に就て極少し斗り研究して見たことがあつて『カントの國家及法律哲學管見』『經濟學論攷』(本全集第 四集一二八四頁以下)に述べて置いた通り、私はカントの説に甚しき不満足を感じざるを得なかつたのである。トコロが數年前アインシュタインの説に接し二三の書物を讀んだ結果私は聊か多年の愁眉を開く事が出来る様に感じたのである。少くともアプリアオリ認識論の壓迫と威嚴とは必ずしも左様に恐るゝには及ばないものであるかの様に思つたのである。其感じの一端を述べたのが右の一論文である。然るに左右田博士から右文に對し未だ批評を聞かぬ内に思がけもなくアインシュタイン研究の最高權威たる石原博士から示教を被る光榮に接したのは、私に取つて實に望外の幸福であつた。博士の示教によつて、私は私の言葉の甚だ拙かつた事を悟つた。

右に掲げた文には、二訂正を加へて置いた。併しソレハ若干の修正に過ぎぬから依然として拙いものであらう。私は態と全文を其儘右に収録することゝし、敢て改稿しない。其譯は、私の二年前言つたことは、其後段々考へ直して見たが、別にアインシュタイン説の意味を誤解したものと思はないからである。否アインシュタイン説は、之を哲學上に推し詰めて行けば、如何してもカントのアプリアオリ認識論、而して左右田博士の内容無制約超經驗、先天的絶對普遍形式的規範としてのゾレン論は、少くとも一部は彼れの説の爲めに打破られることゝなると思ふものである。然るに石原博士は云はるゝ、『私自らはカント哲學からの解放を肯定し得ない』と。尤も解放と云ふ文字の意味次第では、カント哲學からの解放と云ふことは言へないであらうことは、ニュートン又はユークリッドからの解放と云ふことも解放の意味次第で言へないが如くであらう。左様云へば我々は經濟學に於てアダムスミスからの解放と云ふことも亦た言へないものである。然し、少くとも左右田博士が重壓力を以つて經濟學に降伏か滅亡かを迫らるゝ底の内容無制約の絶對的なるアプリアオリ、一切の經驗と全く獨立した、永久妥當的なるアプリアオリからは、

我々はアインシュタインによつて解放せられたと言ふことだけは確かに言ひ得ると思ふ。又我々は彼によつて、カント認識論の大なる誤から救ひ出されたとも言ひ得ると思ふのである。併し専門家中の専門家たる石原博士に對しては、私如き者は何も言ひ得るものではない。何を申しても、博士は恐らく再び『アインシュタインの理論は非常に難かしい數學を知らなければ解らないものであります……外面的の淺薄な觀察が之を促す資格は有たないのであります。これまでの理論に飽いたといふだけで眼さきを變へるといふ程な氣紛れで——併しそれは屢々炯眼といふ假相を以つてあらはれることもあります——原理の變更が稱へられてはならないのであります。自然科學者たちがその實驗室の中でどんなに眞摯にどんなに地味にはたらいてゐるかをじつと見てごらんなさい……社會諸學の上に於て原理改造の論究に従はれる方々に對しても、私は敢て之等の言の中に聴くものゝあるのを見出して頂きたいと思ふのであります……その懷疑は必然なる理由なしに放漫に申し出されてはならないのです。どれだけ普遍的に之が價值づけられてゐるかゞ省みられなければならぬと私は思ひます』前掲誌八、十
三及十四頁と叱

り飛ばされることであらう。

四

ソコデ私はアインシュタイン説の哲學的方面を論じたもので、彼是れ讀んだ本のうち一番私に能く解り又能く説いてあるように感じた本から、左に若干節を引用して私の無効なる陳辯に代へやうと思ふ。此書は過日帝國學士院に於てアインシュタイン博士を招待した節私は特に持參して、博士に此書は貴説研究上如何なる價值を有つものであるかと尋ねたら此れは甚だ價值のあるもので相對性理論の論理的コンセクエンツ(歸結)を細かに思索した産物で、自分が未だ言はなかつたことを能く述べてあると答へられた。又長岡博士も其書は未だ讀まぬが、著者は相對性理論研究者として重きを爲す人であると私に教へて呉れた。従つて私が此書に依頼すること、決して失當ではあるまいと信ずる。

其書とは左のものを云ふ

Hans Reichenbach,

Relativitätstheorie und Erkenntnis Apriori. Berlin Verlag von Julius Springer. 1920.

(ハンスライヘンバツハ著)

相對性理論とアプリアオリ認識

伯林ユリウス・シュプリンガー書店刊行
千九百二十年)

『カントの立證は即ち誤つて居る。構成的原理と經驗との矛盾を確定することは全く可能である。而して相對性理論は此の矛盾を一切の確さを以つて實驗物理學に就て解明したが故に、カントの排列任意 Zuordnungswillkür の假定に對する其の答を、次の一句に總括することが出来る。排列の一貫性を不可能ならしめる排列原理の諸體系、即ち包含的に矛盾した諸體系がある。我々は再び聲明する。此の結果は、自明的ではなく、一の經驗的物理学の首尾一貫した建設によつて始めて可能となつたものであることを。我々が此くの如き科學體系を有さぬならば、少數の直接經驗の結果の解明に於ける任意は餘りに大で、歸納原理に對する一の矛盾なりと云ふことが出来ない。』
四六
頁五

『私を見る所では、此の不斷的擴張の行程こそ、カントのアプリアオリ理論の駁白に對する中核點を提示するものである。……我々が形つくつた排列任意の假定及び經驗によるその打破は、カント自身の考へとは一見した處ほど縁遠いものではない。カントは其アプリアオリ理論を認識の可能といふ事に立脚した。乍去彼れは、彼が此の可能に對して一の立證をも與へ得ないことを能く知つて居た。彼は認識が不可能たる可きことが絶無だとは思つて居なかつた、而して彼は、自然が人間の理性の根本原理に従つて整頓され能ふような單純性と規則性とを有することを一の大なる偶然と看做して居た。此點に關して生ずる概念上の困難を、彼は『判斷力批判』に於て研究の對象とした。曰く『悟性は之なくしては、一の經驗の對象たり得ない自然の普遍法則を先天的に所有して居る。乍去悟性は猶其外に一定の自然秩序を要する。自然が斯く吾人の認識能源に一致することは、判斷力によつて先天的に前提される。』此く自然と理性との適應の偶然性を明瞭に認めたカントが、其にも拘らず固着的なアプリアオリ理論を墨守することは不思議なことである。彼が茲で豫想した場合、即ち悟性が其伴つて來た體系

と自然に於て一の捕捉す可き排列を作り出すことが不可能となる場合なるものは事實に於て起つたのである。即ち相對性理論は理論の明瞭なる體系を以てして、經驗の貫一的排列が最早可能ならずてふことを立證したのである。而して相對性理論によれば之から結論して吾人は構成的原理を變更せねばならぬと云ふのであるがカントによればそれは取も直さず、一切の認識が停止することであると云ふのである。彼は此の如き變更は不可能であると爲すものである。……トコロがカントが未だ知るに及ばなかつた不斷擴張の行程が出て來て此困難に打克つたのである。従つて彼の固着的なアプリアオリは、彼が物理學行程を發見したことによつて打破せられたのである。我々は斯くカントのアプリアオリ理論を解散せしめた上に、更に若干の一般的考察を附言せねばならぬ。我々を以て見ればカントは批評主義的設問を以つて、一切の認識論の最も深い意味を示したが、其の解答に方つて、二箇の目的を混同したのは彼の誤謬である。彼は認識の條件を求めたときに彼は認識を分解せねばならなかつたのである。然るに彼れが分解したものは理性であつた。……認識の種類が理性によつて定

めらると云ふのは正しい。乍去理性の影響が何に存するかは再び認識に於てのみ言現はされねばならぬ、理性に於て表現されてはならぬ。又た理性の論理的分解なるものはあり得ぬ。何んとなれば、理性とは既存の言明の一體系ではなく、具象的問題への適用によつて始めて果を結び得る一の能源である。……斯くて彼は彼れのアプリアオリ原理の提示によつて、根本に於て——其れは彼が時に爾く眞率にして奇抜な言葉を以て一蹴した理性肯定の素樸な形たる——單なる一の常識神聖論たるに過ぎないのである。』
六七一
七〇頁

『アプリアオリなる概念は以上の吾人の考察によつて深刻な變化を被むらねばならぬ。即ちアプリアオリ命題は一切の經驗から獨立して永久に妥當なる可しと云ふ意味にてのアプリアオリは、吾人がカントの理性を分解した結、最早それを維持することは出来ないものである。其反對にアプリアオリ原理あつて初て經驗世界を構成するてふ意味にてのアプリアオリは却つてより、重要となる。事實に於て對象の表現性に關する若干の前提が時空の多様性及對象が他の諸對象との函數的關連によつてなされるのでなけ

れば、單なる知覺の立場以上に出づる物理的判斷は、一も存し得ないのである。乍併、此事から結論を下して、此のアプリオリ原理の形式が初めから確定して居るものであり、而して其は經驗から獨立して居るものであると考へてはならぬのである。従つて批評主義の設問に對する吾人の答は、次の如くなる可きである。之れあつて初めて認識過程の排列を一貫的に可能ならしめるアプリオリ原理はあることはある、乍去、此等の原理を内在的シエーマから演繹することは我々に許されてない。吾人に殘されて居ることは此等原理と漸次的の科學分解的仕事によつて發掘するとそののみであつて、其等の特殊形式が何れほど長く妥當するかの間を斷念せねばならぬのである。』^{四七}

『かくてカントの空間理論が進歩せる物理學の前に倒れた後に於て、我々は其次の普遍化に昇り行つて例へば物理的の空間直觀が何れの事情の下に於ても、少くともリーマン平面を最小部分に於て維持せねばならぬので、此れが眞に永久に妥當なる言明である等と主張せんと欲するものではない。我々は何物を以てしても、吾人の子孫が或時に於ても第四次の線要素に移り行く物理學の前に立つに至るを防ぐことは出來な

いのである。』^{六十七}

『一切の原理は、其れが如何に形つくられて居ても、其れに對して其れが一の特殊の場合たる可き所の、更らにより、普遍的な原理を與へることが出来る。然るときは前に述べた不斷擴張の過程によつて——より、特殊的な言表はしを一の接近と前提して——經驗による吟味は可能である。而して此の吟味の結果如何に就ては、豫め何事をも言ふことは出來ない。』^{七十八}

『認識を以て一貫的排列なりとする定義は何處から來るか答へて曰く、從來の經驗の分解から來る。乍去、何物と雖も、吾人が或日に於て、此の一貫的排列を不可能ならしめる諸經驗の前に立つことを防ぎ得ない。今日の諸經驗が吾人に示すにユークリッドの空間を以てしては、最早進むことが出來ないことを以てしたと丁度同じ様に。』^{七十九}

『吾人は認識の現在の條件が、最早カントに於けると同一ではあり能はぬことを理解する。何となれば認識てふ概念が變じ、物理的認識の斯く變化した對象は、又た異なる論理的條件を前提するから。此の變化は經驗と接觸するによつてのみ生じ能ふもの

である。従つて認識の原理も經驗によつて決定されるのである。乍去其の妥當は個々の經驗の判断のみに基くのでなく認識の全體系の可能性に基くのである。是れがアプリオリの意味である。吾人が四座標間の尺度關係によつて現實を記述し能ふことは、全物理學の妥當なるが如くに確かである。唯だ此の規則の特殊の姿が經驗物理學の一問題となつたのである。此の原理は物理的現實の概念的見解の根據を成すものである。一切の從來の物理的經驗は——其れが成されたる限り——此の原理を確めた。乍去斯く言へばとて、或日に於て吾人に更らに一の不斷擴張を餘儀なからしむる諸經驗が起ることを否むものではない。然るときは物理學は再び又た其の對象概念を變更せねばならなくなり、經驗に前置するに新しき原理を以てするに至るであらう。アプリオリとは『經驗の前に』と云ふことであるが『凡ての時に向つて』と云ふことでもなく、又た『經驗から獨立して』と云ふことでもない。』九九頁—

私は石原博士及び左右田博士がライヘンバツハの以上の諸言に對して、何と云はるゝかを知らんと切望して已まなうものである。序に申す、カント派の或もの、就中フアイヒ

ンガーの『あるかの様子の哲學』の立場から、アインシュタインに猛烈に反對する哲學者の合作に左の如きものがある。

Annalen der Philosophie 2 Bd. 3. Heft.

“Zur Relativitätstheorie” Leipzig 1921.

『哲學紀要第二卷第三冊相對性理論』

此の中でもブラーグのクラウスの論文は甚だ猛烈なものである。

右と異りアインシュタイン説に著しく好意を有する哲學者の論は、

Ernst Cassirer, Zur Einsteinschen Relativitätstheorie: Erkenntnistheoretische Betrachtungen.

Berlin 1921.

『カッシーラー著アインシュタインの相對性理論に就て認識論考察』

又た有名な佛國の哲學者ベルグソン（一時我邦に於て大いに持はやされた）に左のアイ
ンシュタイン批評の書がある。

Henri Bergson, Durée et Simultanéité a propos de la théorie d'Einstein. Bibliothèque de-

Philosophie Contemporaine. Paris 1922.

此の外野學士若くは論議士からアインシュタイン相對性理論を論じたものまで私が今日まで見たものにはこの通りである。無論此外にも幾回かアインシュタインの著書

Schäfer, Das Raum-Zeit-Problem bei Kant und Einstein. Berlin 1921.

Schmitt, Das Weltbild der Relativitätstheorie 2 A. Hamburg 1920.

Petzold, Die Stellung der Relativitätstheorie in der geistigen Entwicklung der Menschheit.

Dresden 1921.

Bollert, Einsteins Relativitätstheorie und ihre Stellung im System der Gesamterfahrung.

Dresden und Leipzig 1921.

Dingler, Relativitätsprinzip und Oekonomieprinzip. Leipzig 1922.

Geiger, Die philosophische Bedeutung der Relativitätstheorie. Halle 1921.

Fischer, Das Einsteinsche Relativitätsprinzip und die philosophischen Anschauungen der

Gegenwart. Wissen u. Glauben. Jahrgang 19. Heft 5. 1921.

Siebert, Albert Einsteins Relativitätstheorie und ihre kosmologischen und philosophischen

Konsequenzen. Langensalza. 1921.

(11・11・11)

II 世界を脅かす國家破産の危機

——對獨態度を根本的に改められば——

會て本誌^{實業之}世界に於てアインシュタインの相對原理の事を話した事があるが現在の
ドイツに於て此大發見にも増して識者の血を沸かしつゝある書物がある。夫れはドイ
ツ人が書いた書物でなくドイツの敵國なるイギリスの學者で然もヴェルサイユの平和
會議にイギリスの大藏大臣の代表者として參列して講和條約の締結に最も重大なる關

係を有して居つたジョン・メイナード・ケインズ John Maynard Keynes (ケインズと發音する人もある)と云ふ人の著はしたもので、其原書は一昨一千九百十九年の十二月に出版されたものであつて、昨年の始頃には既に我邦に來たから恐らく之を手にした人も少くないであらう。其書は題して『平和の經濟的結果』(The Economic Consequences of the Peace)と云ふ全編僅か二百八十頁許りの小冊子である。此の英人の著書を私の友人であるベルリン商科大學教授で、ヴェルサイユの講和會議へケインズと反對にドイツの財政顧問として出席したモーリツ・ユリウスボンと云ふ人がブリングマンと云ふ人と共同してドイツ語に翻譯し『平和條約の經濟的結果』(Die wirtschaftlichen Folgen des Friedensvertrages)と題して昨年の五六月頃出版した其書物である。聞く所によれば、此ドイツ譯は既に數萬部を賣盡したさうである。此獨譯書も近頃我邦に到來して居るやうであるから是を見た人も恐らく少なくないであらう。併し此著が今ドイツに於て、又フランスに於ても非常に評判の書物となつて居る事は、或は知らない人があるかも知れない。著者のケインズと云ふ人は本年僅か四十歳斗りの壯年學者であつて、其父は『經濟學研究法』と云ふ

有名な書物(たしか天野爲之先生が邦譯せられたことがある)を著はしたイギリス經濟學の碩學の一人である。息子のケインズは今より十年許り前から今日まで引つゞいてイギリス經濟學協會の機關雜誌『經濟學雜誌』の編輯者であり、又選ばれてインド財政幣制調査會委員となり、其結果が『インドの幣制及財政』と云ふ可なり有力な著書となつて現はれて居る。彼は戦争が始まると間もなくイギリス政府が民間から人材を蒐集した其一人として選ばれて大藏省の顧問官となり、戦時中英國の財政に參與して拔群の成績を現はした。是がロイド・デューヂの見出す所となつて、ヴェルサイユの講和會議に參列すべきイギリス大藏大臣の代表者に選ばれたのである。然るに彼は講和會議の進行するに伴れて、イギリスがフランスと共にドイツに對して要求する講和條件が甚だ不當であり、苛酷であることを深く感じて極力争つたが、彼の議は遂に容れられる所とならなかつた爲に、一昨年の六月七日斷然一切の公職を抛つてイギリス政府との關係を斷つた。爾來數ヶ月彼は閑居して講和會議に參與した見聞を蒐集して、茲に云ふ『平和の經濟的結果』なる小冊子を著したのである。其書の内容は實に驚くべき程の大膽と率直とを

以て書かれてある。而して全體を通じての彼の理想は極めて高く、然も一々事實に就いて的確に立論してあるが故に、イギリス人も之が爲に僻見を破られる事が甚だ尠なくなぐ、殊にイギリス政府の財政の職に在つた者が、今や斯くの如く反旗を翻へしたと云ふ事は、ロイド・ジョージ政府に取つては一大敵國の思があるのである。其議論の大體は、ドイツに對して苛酷の條件を課することの歐洲平和の爲、世界平和の爲に甚だ不可なる所以を痛論したものであるが故に、獨人が争つて此書を讀むのは無理ならぬことでもある。併し我々が興味を持つのはケインズのドイツ最良論ではない。彼の議論に依つて我々が最も深く動かされる所は、今や歐洲の文明諸國家は等しく皆破産に瀕しつゝあると云ふ事である。而して其破産は決して敵國なるドイツの破産のみでなく、却つて戦勝者たる所のフランス、イギリスの破産を語るものであるが故に、我々は是に對して甚だ大なる興味を持つて居るのである。

ヴェルサイユに於ける平和會議の様は、我邦からも通信員が行つて可なり詳しく報道されて居つたやうであるけれども、併し其真相に至つては未だ十分に知れ亘らざるものが多く、殊に經濟財政上の方面に至つては甚だ僅かしか知られて居らぬ。此の點から言つても、イギリス藏相の代表者たるケインズの事實に基いた著述は甚だ参考になるものと云はなければならぬ。而して此の書とともに我々が大なる興味を以つて讀んだものは、デーリー・テレグラフ通信員のドクトル・デイロンの『平和會議』 Dr. Dillon, The Peace Conference と題する書物である。デイロンは財政經濟の方面は殆ど論じて居らないが、講和會議其ものゝ事實や其經過に就ては我々が日本に居て知る事の出来ない真相を可なり詳しく其書に於て記述して居る。殊に彼がウキルソンの弱點を擧げる所、ロイド・ジョージの講和會議に於ける態度、之と對應してクレマンソーが如何なる事を爲したかを甚だ趣味深く叙述して居て、我邦のウキルソン信者ロイド・ジョージ教徒には是非一度讀ませたいものである。而してデイロンの詳しく記述する所と、ケインズが簡潔に記述する所と、殆んど符節を合したやうに同じであることは、新聞通信員たるデイロンの記事が正確であることを證明するものであると思ふ。

二

デイロンの書物を一度讀んだ人は、彼の姉崎博士一派の如く、ウキルソンを以て世界の救世主と思ふ事の如何に馬鹿々々しい事であつたかを直ちに悟了するであらう。ウキルソンは嘗に世界の救世主でなかつたのみならず、デイロンの記述する所及ケインズの記述する所に依つて見ても、今日の如く世界を甚だより悪しくした第一の責任者と言はなければならぬ。デイロンは戯に、ウキルソンは常に『世界をしてデモクラシーに對して安全なる所』と爲べく努力すると言つたが其の結果は『世界をして偽善に向つて安全なる所』と爲したものであるとさへ言つて居る。ウキルソンの動機其ものは或は高潔であつたかも知れないが、講和會議に於て彼の爲した所は如何にも薄志弱行の好標本であつた。彼が薄志弱行であつたと云ふ事は、彼に取つて其名を損ずる事甚しい位は何でもない。之が爲に五年に亘る大戦争の結末が滅茶々々になつて了ひ、獨り彼の標榜した十四ヶ條が散々に蹂躪されたのみならず、又國際聯盟なるものが世界平和を保障すべき

ものでなく、却つて世界の戦亂を促進する機關となるの結果を惹起したに止まらず、クレマンソーをして飽く事なく、戦勝國の暴威を振ふを恣にせしめたと云ふ大責任を負はなければならぬ。彼は人道の旗頭でないのみならず、其結果から言へば人道の大裏切者と言はなければならぬ。此頗末はデイロンの記述する所とケインズの言ふ所と全く同じである。

若しウキンソンがナマジナマナカ講和會議に參與する事がなかつたならば、世界の人はクレマンソーによつて代表せらるゝ佛國の横暴に對して相當の警戒をしたであらう。然るにウキルソンある爲めに世界の人々、殊に戦敗國たるドイツ、オーストリアは左迄滅茶々々な事はしはしまいと安心して居つた。其期待が悉く裏切られたのである。講和會議の際ドイツ國民中の識者は思へらく、ウキルソンにしてパリに居る以上、ウキルソンが眞に賛成した條件ならば、假令ドイツに取つて忍ぶべからざる條件でも是は我慢しなければならぬと。朝鮮に於て獨立運動が起つた際、ウキルソンが今に飛行機に乗つて朝鮮の獨立を援助すべく來ると言つて山の上に登つて待つて居つたと云ふ話は朝鮮

人が如何にも無智である事の一つの例として傳へられて居るけれども、實はヨーロッパの戰敗國の人々は之と殆ど同じやうな期待をウキルソンに繋けて居たのである。其のウキルソンが講和會議に於て殆ど一言の抗議をも提出する事なく、悉くクレマンソンの軍國的貪慾の前に屈服した。ロイド・ジョージは英國の利害に關係を及ぼさない限りに於てはクレマンソンの爲す儘に、又ウキルソンの賛成する儘に任して、唯事自國に關する場合には、自國の立場を飽く迄も支持したのみであると傳へられて居る。此點もケインズの言ふ所とデイロンの言ふ所と殆ど同じである。其結果私が茲に言ふ所の今歐洲を脅しつゝある國家破産危機の勢を促進したものであるとしたならば、今の世界に於て最も多く非難されるべき人はウキルソン其人であらねばならぬ。無論クレマンソンも十分責めなければならぬが、併し乍らフランス代表者の立場としては諒とすべき點が甚だ少くないのである。デイロンの記述する所でも、クレマンソンは値切られることを覺悟で掛値をして散々吹いたのである。彼は其言ひ出した事が其儘通過するとは決して豫期して居なかつたのであるが、ウキルソンの薄志弱行の爲に殆ど其全部が通過したと

云ふことは寧ろ彼に取つても意外のことであつた。之が世界をより、良くしないのみならず、遂かにより、悪くする最大原因となつたのである。

他の點は暫く置いて、今經濟上から少し考へて見よう。一體國家の破産と云ふ事は甚だ極端で重大のやうにも見えるけれども、之を過去の歴史から見ると左程珍らしい事ではないのである。十九世紀丈の例を取つて見ても略ぼ次の如き實例がある。先づドイツから擧げて見ると、一千八百七年、同十三年プロイセン、一千八百十二年ウエストフリア、一千八百十四、五年クルールヘツセン、一千八百五十年シュレスウキク、ホルンユタイン、次に、オーストリアは一千八百二十年、同三十二年、同三十四年、同五十二年、同六十七年、千八百十四年、スペインは一千八百二十年、同三十二年、同三十四年、同五十二年、同六十七年、同七十二年、同八十二年、ギリシアは一千八百二十六年と九十三年、ホルトガルは一千八百三十七年、同五十二年、同九十二年、ロシアは一千八百三十九年、トルコは一千八百七十五年、同七十六年、同八十一年、エジプトは一千八百七十六年、ヨーロッパ以外ではアメリカの十州が破産したとがある。南アメリカでは破産しない州は一州もなく、中には數回破産

を重ねたのもある。一千九百十六年ロンドンの取引所に上る公債發行國六十一ヶ國中、完全に債務を果した國は僅かに三十五であつて、二十六ヶ國は其の債務を完済しなかつた。完全に債務を完了しない國の内、一部分の債務を果した國はバヒア、ブラジル、プエノザインス、コロムビア、リベリア、ニカラガ、パラガイ、ペルー、サルヴァドル、ウルグエイ等で、全く債務を踏倒した國は十五で、コリエンテス、エクアドル、ホンデユラス、メキシコ、モンテネグロ、ポトン、アラバマ、アルカンサス、フロリダ、ジョージア、ルイジニア、ミシッピ、北カリオナ、南カリオナ、ウエストバーヂニア等である。以上マネス著『國家破産經濟的及法律的考察』による。十九世紀以前に遡つても國家破産は決して少なくないのである。併し乍ら今日我々の前に横はつて居る所の國家破産は、是等の國家破産とは其意味を著しく異にして居るのである。右の諸國の國家破産と云ふは國家が其公債として借り入れたる金額の元金若くは利子を支拂はなかつた、又は支拂ふことが出来なかつたと云ふに止つて居る。言はず金錢貸借上の一の異例に過ぎないのであるが、今日のは國家が其債務の元利を償却し能はざるは無論の話であつて、夫は寧ろ一部分の現象に過ぎないので、其の他に色々な條件があ

るのである。其の甚く所は著大なる戦費及び戦争に依つて被つた富の破壊にある事は云ふ迄もない。併し乍ら五年にわたる大戦争の爲めに被つた經濟上の損害は、必ずしも國家破産を持ち來さねばならぬと云ふ譯ではない。之れを國家破産とすべきかすべからざるかと云ふ事は、國際經濟會議の決定し得可き所であつた、又國際經濟會議は之を決定すべき使命を以て開催されたものである。然るに此國際經濟會議に集つた各國が、何れも自國を本位としてのみ考へて居つたが故に、世界に亘たる國家破産を如何して防止すべきかと云ふ事に就いては、殆ど計劃を立てる所がなかつた。此點に於て最も責任の輕いのは我日本である。

三

我日本は世界的……少なくともヨーロッパ全體に亘る國家破産を救ふべき何事もしなかつたが併し其破産の勢を促進すべき何事をも亦しなかつたのである、する力がなかつたと言つた方が適切であるかも知れないが兎に角積極的に罪惡を犯して居らない。

日本以外の國は殆ど皆夫々に責任を負はなければならぬのである。大國は大國なりに、小國は小國なりに其の爲すべきを爲さず爲す可からざることを爲したと評せざるを得ないのである。フランスが戦争の爲に大なる損害を被つた事は事實である。而してフランスが戦勝國である以上、出来る丈け此損害を敵國からの賠償に依つて救済しようとすることは決して不當なる考と言ふことは出来ない。併し乍ら若しヨーロッパ中に國家破産が普及するならば、フランスは其の期待した所の自國經濟の救済を事實に於てする事が出来ない事になる他はない。然らば是は自殺的行爲と言はねばならぬ。我々を以て見れば、クレマンソーは將に此大なる自殺行爲を敢てした者である。之を止むべき地位に立ち然も此の點に就ては局外に在り、否ヨーロッパを經濟的に救済する實力を備へて居る、殆ど唯一の國であるアメリカの代表者たるウキルソンが、此の勢を防止すべく何事をもしなかつたのみならず、却つて此勢を助長する結果を惹起した事は、大なる失策として歴史の上に長く記録せねばならぬ事である。フランスとしては他國にして異議を申立てざる以上、ドイツから取り得べき丈け取り、而も其賠償の大部分を自國に取らう

とする事は決して無理のない事である。同じく戦争の爲に打撃を被つたと云ふ内に於て、感情の上から云へばベルギーが先づ第一に救済されなければならぬやうに考へるが、ゲインズの調査した結果に依ると、ベルギーの被つた損害は甚だ微少なものである。彼はベルギーが戦争の爲に被つた有形財産の損害は之を磅に積つて最高一億五千萬磅を出でない。此れに他の一切の損害を加へて通計五億磅が相當であると言つて居る。是には夫々論據を擧げて居るが詳しい事は略す。成程戦争の始めこそベルギーはドイツ軍の爲に蹂躪されて大なる損害を被つたけれども、併しそれは始めの間に限られたので、殆ど完全にドイツ軍の占領の下に立つやうになつてからは、ゲインズの言ふ所に據ると、ドイツ軍はベルギーの經濟的恢復の爲に相應に盡した。夫はドイツ自身の利益の爲にしたものである。何故ならば、ベルギーを荒して置いたのではドイツ軍が軍需品を得るにも食料品を得るにも非常に困る。イギリスやアメリカ邊りの新聞に、ドイツ軍がベルギーに於て非常に慘虐な事をしたやうに書いてあるが、其多くは嘘である。自分達が戦争中足を止めて居る所の人民の怨を買つては何で安心して住んで居られよう。自分

の利害の上から考へてもそんな馬鹿な事をする筈がない。殊に經濟上に於てはドイツの勤勉と努力とを以つて、物資の供給を出来る丈けベルギーの土地から擧げるやうに施設を爲したのである。故に戦争が済んで見ると、ベルギーは或る點に於てドイツ兵に少しも侵された事のない時よりも、立優つた改良的施設を惠まれた結果に至つたものも少なからずある。無論戦争がなかつた時とは比較は出来ないけれども、戦争の眞先に襲撃を被り長く敵國の爲に占領された土地としては、ドイツ軍占領の下にあつたベルギー位能く維持された所は、殆ど今迄の歴史に例がないと言つても好い位だと云ふことである。

併し此處に一つの大きな問題がある。夫はドイツ軍がベルギーの人民から物を買ふのに、代價として與へたものは紙のマルク紙幣である。其始末は少しも附けてない。之が今日のベルギーに取つて大なる問題である。ドイツのマルクが下れば下る程ベルギー人の所有する紙幣も下るのである。ドイツのマルク紙幣の價値が恢復すると云ふ事は、ドイツ人自身同様ベルギー人並にドイツ人に依つて占領された地方のフランス人民

の大問題であると言つても好いのである。されどドイツを亡ぼすと云ふ事は自分達を亡ぼす所以であることは、此一點に於ても甚だ明白であるのである。

ベルギーに較べるとフランスの方が、ドイツ軍襲撃の爲めに被つた經濟的損害は遙かに大である。ケーンズは、財産の損害、人命の損傷並びに戦争の爲に被つた財政上の負擔（主として借金）其等の一切を打算して見ると、此度の戦争に参加した國の内、アメリカを除いて一番損害が少いのはベルギーであると斷言して居る。其反對に最も大なる損害を被つたものはセルビアであつて、而してセルビアに次で最大の損害を被つたものはフランスであると言つて居る。是は如何にもさうであらうと思はれる。然らばフランスの損害は何の位であるかと云ふと、ケーンズは次の通りに計算を立て、居る。

ドイツ軍によつて有効に占領せられたフランスの面積は約一割で、敵の爲めに荒廢に歸した割合は、フランス總面積の百分の四に當る。三萬五千以上の人口を有するフランス都市の中、敵の爲めに破壊された都市はランとサンカンタンの二市のみである。一九一七年刊行フランス統計年鑑によれば、フランス全體の家屋の價は二十三億磅（五百九

十五億フラン)であつた、而して戦前の價で一億二千萬磅、今日の價で二億五千萬磅位が破壊されたる家屋の價と見積る可きである。土地の方はフランス全體の地價二十四億八千萬磅乃至三十一億千六百萬磅なりとせられて居るから、ドイツ軍の爲に破壊せられた割合の價は逆も三億磅ありはせぬ。其他器具器械の損害、炭坑、運輸機關の損害等一切を積算して、總計五億磅以上と見積ることは出来ぬ。レネビュパンの計算によつても敵軍襲撃によるフランスの損害は四億磅から六億磅(百億フラン乃至百五十億フラン)だと云ふことで、予(ケイメンズ)の計算は其の中間に在るものであると云つて居る。然るにデュボアは最低額二十六億磅(六百五十億フラン)たる可しと云ひ、改造大臣ルーシュユルは三十億磅(七百五十億フラン)として居る。是れはビュパンの數字の倍以上である。フランスの損害は右の外敵軍占領地人民に課せられた各種の徵發貢獻、フランス商船の獨軍艦から蒙つた損害等がある。此等の損害は全體として二億磅と見たら妥當であらう。假りに讓歩して其を三億磅とし前の五億に加へて全總計八億磅を以てフランスが賠償を受く可き額としたら總當であらうとケイメンズは云つて居る。然るにフランス太

藏大臣クロツツは一九一九年九月五日議會に向つて公言すらく、フランスの財産損害は五十三億六千萬磅(千三百四十億フラン)なりと。これは予(ケイメンズ)の計算の六倍に當り甚だ法外であると。

四

次に英國に就て、ケイメンズは白く英國の損害は、主として海上の損害である。其の他空中襲撃による損害もあるが其は金額にすれば僅である。兎に角此等の損害額は五百萬乃至千萬磅と見れば十分である。英國商船の損害は漁船を除いて二千四百七十九隻で總噸數七百七十五萬九千噸、一噸當り三十磅と見て其額二億三千萬磅、積荷の損害噸當り假りに四十磅と見て三億千萬磅、右二口合計五億四千萬磅となる。之に前の項目を三千萬磅として加算すると總計五億七千萬磅となる。即ちベルギーの損害總額の五億より少し多いと見る可きである。

其他諸國の損害を、一切合切で二億五千萬磅とすると左の如き數字を得る。

(單位百萬磅)

ベルギー	五〇〇
フランス	八〇〇
イギリス	五七〇
其他諸國	二五〇
合計	二二二〇

即ち二十一億二千萬磅(今日の爲替相場では約百六十五億三千六百萬圓)となるのである。

以上の數字は、元より推定概算に基くものであるから、批評の餘地は多くあるであらうが、兎に角最低十六億磅から最高三十億磅の間と云ふことは、決して甚しく正鵠を失つては居らぬと信ずると氏は云つて居る。だから講和條件として聯合國はドイツに課するに二十億磅(約百六十億圓)の償金を以てしたら、最も當を得て居るし、ドイツの支拂能力も此れ位ならば應ぜられると云ふのが、ケーンズノ結論である。

附 記

ヴェルサイユに於ては、總額は決定せず、唯第一回の支拂高丈を定め、後は追つての事に譲つた。然るに本文起稿後我邦新聞紙に現はれたルーター電報の報ずる所によると、聯合國最高會議は左の通り定めたと云ふことである。

『聯合國最高會議にてドイツは其交戰國に對し總額金貨二千二百六十億マルクを支拂ひ、猶外に四十二年間ドイツの輸出品に對し一割二分五厘の税金を負擔す可しと云ふ事にした。』

最高會議は賠償條件を確立し今後四十二年間にドイツをして支拂はしむ可き年賦額を決定した、即ち最初の二年間は金貨二十億マルク宛、其後三年間は三十億マルク宛、其後三年間は五十億マルク宛、而して残りの三十一年間は六十億マルク宛支拂はしむる外に、右四十二年間ドイツ輸出品に對し一割二分五厘の從價税を課することとなつた(一月二十九日ルーター)。

又た別報によると、右額は磅に換算して百十二億三千萬磅(約九百億圓)で其分配額は

(單位百萬磅)

英國	二四一六
佛國	五八七六
其他諸國	二九三八

二 世界を脅かす國家破産の危機

計

一三三〇

で輸出税額は數年の中には毎年百萬磅に達すると云ふことである。

之れを本文ケインズの主張に比べると殆んど六倍に當つて居る、實に驚く可き亂暴な要求である、こんな無法な要求に屈服する位なら、オーストリア同様身代投出しをした方が勝るとドイツ國民は感ずるであらう。然るに林毅陸氏はドイツが之を諸せねば強制しても取る可しと言はれたとか、暴論も亦極れりと云ふ可きである。そんなタイムス受賣一天張りでかためた頭で日本の外交をやられるのは、我々國民の迷惑此上もないことである。

此度の戦争に對する賠償として、ドイツが何程支拂へば此の義務を完了すべきかと云ふ事は、確定せず居るのであるが、是は拂ふ方に取つても取る方に取つても甚だ面倒な事であつて、拂ふ方では何程拂つたならば義務を免れる事が出来るのか分らないので、國の財政の立方の標準が立たない譯である。又受取る方でも幾らドイツから取り得るものがあるかと云ふ計算が分らぬのである。併し乍らフランスに取つては——其他の國もであるが——主としてフランスに取つては此賠償額の分らない方が花である。何故ならば、フランス今日の國庫の歳出入はどうして見ても辻褄が合はないのである、非常な歳

入の不足が現はれて居るのである。而して其事實を嚴正に曝露すれば、之は國家破産と云ふ事を率直に語る他はないのである。現在はドイツから取るべき所の賠償額がある。然も其賠償額は幾らでも取り得るかの如くに爲して、己を欺き人を欺いて居る事に依つて辻褄を合したやうにしてあるのである。けれども無い袖は振れないので、幾らドイツから賠償を取ると言つても拂へない賠償は結局取れないことになるのである。此點はケインズが右の書物の大半を擧げて力説する所であつて、無論戰敗國たるドイツ、然も此度の戦争の最大責任者たるドイツが、何等賠償を拂ふ事なくして濟むべきでない事はケインズも認める所であるが、唯其賠償はドイツの支拂能力に應じなければならぬ。さうでないとは拂へないものは到底拂へないのである。其拂へないものを拂ひ得るものゝ如くにして立てゝ居るのが、今のヨーロッパ諸國の豫算である。

ドイツが拂へないとなつて身代を投出す時は、即ちフランスが歳出入の辻褄が合されないで、其世帯を投出すことを直に伴ふ外はないのである。最近の海外電報に據れば、オーストリアは既に國家破産を宣言したとか、或はせんとしつゝあるとか云ふ事であるが、

我々日本人として、此報道に依つて膽を寒からしむるのは、オーストリアの破産其事ではない。今日のオーストリアは破産するもしないも大した相違はないのである。是に反してフランスが破産する若くはイギリスが破産すると云ふ事になると、是は重大な結果を世界經濟の上に與へるのであつて、延いては我々日本にも及ばざるを得ないのである。日本に及ぶ前にアメリカに及ぶに相違ない。アメリカが影響を蒙るの結果は、必ず日本へも波及するに相違ないのである。ケーンズは此點からして、此のドイツ賠償問題を略ぼ次の如くすべしと言つて居る。

第一、ドイツが聯合諸國に對して支拂ふ賠償總額を二十億磅と確定する事

第二、ドイツが講和條約に依つて聯合國に引渡すべき商船電信其他の物質の價格を五億磅と計上し、之を右の二十億磅より控除すべき事即ちドイツが金を以て支拂ふべき高を十五億磅とすべき事

第三、十五億磅に對しては一切利息を附けず、ドイツは之を三十ヶ年賦にして一ヶ年五千萬磅宛一千九百二十三年より始めて支拂ふ事とすべき事

第四、ドイツの賠償を確保する爲に設けられたる賠償監督を全廢し、之に當る機關を

國際聯盟に附屬せしめ、其内にはドイツ及中立國の代表者をも加ふべき事

第五、ドイツが年々支拂ふべき五千萬磅は、ドイツが支拂ひ得る方法に於て支拂ふことを許す事、又外國に於けるドイツの公私の財産を沒收することを全然止め、平和條約第二百六十條を廢する事

第六、オーストリアよりは何等の賠償を取らぬ事

右の六ヶ條である。然し斯うすると聯合國の間に賠償の殆ど取れない國が出来る。

五

其處で夫を救済する策としてケーンズはアメリカの力を借ると云ふのである、アメリカの力を借りてどうするかと云ふと、戰爭の爲に生じた各國間の公債は總て棒を引いて了ふのである、戰爭の爲に起つた各國相互間の公債の高に就いて、ケーンズは次の如き表を擧げて居る。

債權國	債務國						合計
	英國	佛國	伊國	露國	セルビア	その他	
英國	2,000,000,000 磅	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	4,000,000,000 磅
佛國	500,000,000	2,000,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	4,500,000,000 磅
伊國	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	3,000,000,000 磅
露國	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	3,000,000,000 磅
セルビア	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	3,000,000,000 磅
その他	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	3,000,000,000 磅
合計	1,500,000,000	1,500,000,000	1,500,000,000	1,500,000,000	1,500,000,000	1,500,000,000	9,000,000,000 磅

即ち各國間の債權債務總額は四十億磅に達するので、右の表に掲げた相互間の貸借を悉く帳消しにして、債權國は取立てず債務國は拂はないことにする。例へばフランスは債務の合計が十億磅で債權が三億磅ある、之を帳消しにするとフランスは七億磅許り得をする事になる。詰り一番損害を被つた代りに澤山まけて貰ふ事になる。イタリイは

債務合計が八億磅あるが、是は矢張り全部まけて貰ふ事になる。露國ベルギー、セルビア、其他小國も丸儲けをする。イギリスは債務の合計が八億四千萬磅あつて、債權合計が十七億四千萬磅であるから、此帳消しに依つて九億磅許り損をする事になる。但し此等は何れも紙の上の計算で、實際は大分違ふ、即ち英國の債權十七億四千萬磅中五億七千萬、佛國の債權三億五千萬磅中一億六千萬は何れも露國に貸したので、之は棒を引くも引かぬもない。今の處迎も取れる見込みのない云はゞ零のものである。そこでケレンズは例へば英國の債權全額の實價を其五割と見れば、貸高は實際は八億七千萬で、借高八億四千萬と大差ないことになるから、結局大した損得がないことになる。其の反對に佛國の得は、右の紙上の數字よりも遙に大であると云つて居る。佛國の債權中露國に對する分を除けば二億許りとなり、債務の十億から之を引けば本當の得は八億近くになるわけである。一番損をするのはアメリカで、アメリカは債務が一文もなく、債權許りであるから、債權全額二十億磅を棒に振るのである、是れはアメリカに取つて無論重大問題であるに相違ない。然し乍ら世界の全體に互る國家の破産を防ぐには大なる犠牲を拂はなければな

らない。而して其の犠牲は拂へる國が拂つて呉れるのでなければならぬ。イギリスも既に何億かの損をする以上、戦争の爲に殆ど何等の損害を被らなかつたアメリカ、茲に正義人道を標榜して戦争に加はつたアメリカは、少なくとも經濟上に於て是丈の犠牲を拂つて呉れても好い筈であると云ふのがケーンズの論據である。此のケーンズの議論は、無論アメリカ人に喜ばれず、英人にも亦喜ばれないであらうが併し何か斯う云ふやうな工夫をするに非ざれば、ヨーロッパ全體に亘る國家破産を防ぐ道はないと云ふ事だけは確かである。所が現在では却々さう云ふ考へになつて居らず、是等總ての夫々の負擔を少なくしないで其全部をドイツから取らうと云ふのである。ドイツにして果して夫丈のものを支拂ふ力があるならば夫はドイツが如何に困つても致し方がない事であるが、ケーンズはドイツには到底之れを支拂ふ力のない事を有力に列擧して居るのである。

ケーンズの材料の一部分は、ドイツの講和委員が提出した抗議書に基づいて居る。夫はアメリカの國際仲裁協會の刊行物として一昨年十月出版した『講和條約條件に関するドイツ委員の申出』と云ふものゝ中にも掲げてある。ケーンズは單り是れのみならず、自己の研究に基いて様々の主張を立て、居るので、ドイツ側の意見を其儘採用したものである。尤も今日ドイツの經濟状態を的確に知ると云ふ事は誰人も殆ど出来ない所であつた、ドイツの學者識者、當局者ですらも的確なる材料を持つて居ないのであるから、外國人が自分の誤なき判断を下すことは到底出来ない相談である。是は言ふ迄もないことである。であるから多少の相違はあるであらうが最近の電報にあるやうに百億磅以上の賠償と云ふ如きは到底事實上不可能の事であることは疑を容れない所である。ケーンズがドイツの支拂ふべき償金の總額と、物資の賠償を五億磅と見積つて、夫れを入れて二十億磅とすべしと云ふのは、無論大多數の人から見れば極めて低きに過ぎるであらう。而して賠償額を此の點に止めれば、ドイツから百億磅も賠償が取れると云ふ事を當てにして立て、居る英佛米其他戰勝國の豫算の立方は根本的に改めなければならぬ事は言ふ迄もない事である。併し乍ら國家の豫算は虚偽の上に立てられてはならぬ。唯數字上の辻褄が合つた丈けではないかぬ。嚴格なる事實の上に打立てられたもの

でなければ破綻を生ずる事は眼の前に見えて居る所である。假にケインズの言ふやうにするならば或は國家の破産を免れる事が出来るであらうが、今日の所ではケインズの意見が聞かれようとは殆んど思はれない。併し二十億磅と限らず假に三十億磅としても之れが事實に近いものならば、世界破産の非運から人類を救ふことが出来るであらうが事實より著しく懸隔つた計算に基づいて立てられた各國現在の豫算を見ては、國家破産は殆んど疑ふべからざる事實として我々の前に横たはつて居ると言はなければならぬのである。

六

ケインズの言を紹介することは以上に止めて、以下國家破産の危機を暗示す可く我々の目前に横たはつて居る事實を二三指摘して見やう。

第一は、各國共其貨幣の購買力が著しく減少したことは是である。同じく貨幣價值の減少と言つても、今日實際の事實として二つの全く違つた事實が其中に含まれて居るのである。一つは貨幣の對内價值の暴落で、二つは對外價值の暴落である。對内價值の暴落と云ふのは之れを最も的確に知り得るのは物價の騰貴である。此に就ては、ツヒ數日前入手したコンラッド經濟年報の昨年八月號に、有名な物價研究者オイレンブルヒの『戦後の物價革命』と題する論文が載つて居る。氏はドイツ及び聯合諸國に就て詳しく研究した結果、戦争の前年なる一九一三年の指數を基數として左の結果を得て居るのである。

一九一三年の物價を一〇〇とせる各年(各月)の物價指數

年月	英國	佛國	伊國	米國	瑞典	獨逸
一九一四	九九	一〇三	九六	一〇〇	一一六	一〇一
一九一五	一二三	一四一	一三二	一〇一	一四五	一三九
一九一六	一六〇	一四二	二〇一	一二四	一八五	一四八
一九一七	二〇〇	二六三	二九八	一七七	二四四	一六二
一九一八	二二五	三四一	四〇七	一九六	三三九	二〇三
一九一九	二三五	三五八	三六六	二二二	三三一	三四八

二 世界を脅かす國家破産の危機

三 經濟危機と經濟恢復

一四五

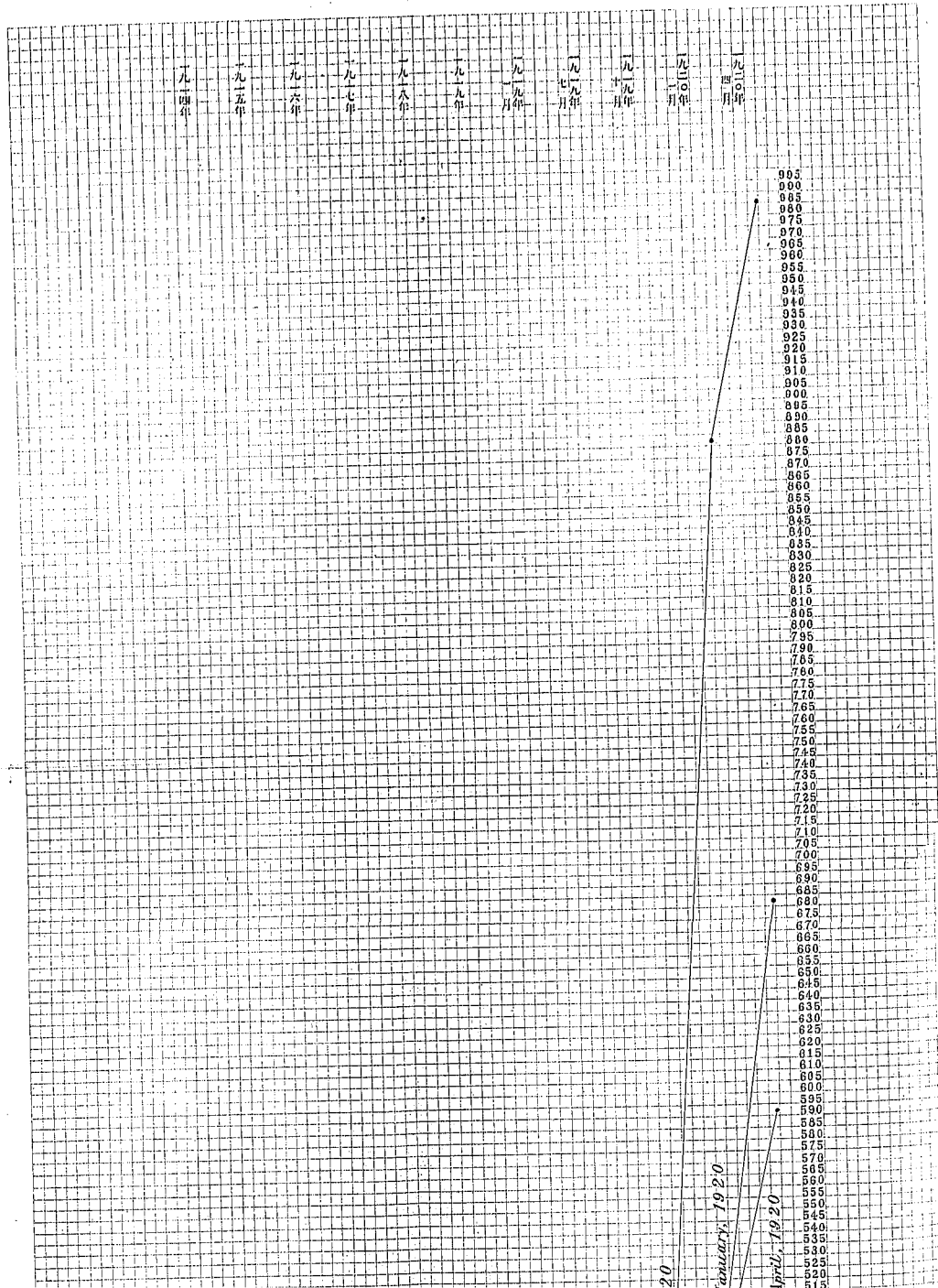
國名	一九一九年一月	同 七月	同 十月	一九二〇年一月	同 四月	米國	瑞典	獨逸
英國	二二七	二三九	二五三	二八八	三〇六	二〇四	三六九	二五四
佛國	三四九	三五〇	三八三	四八九	五八六	二一九	三二〇	二八六
伊國	三二五	三六三	三九〇	五〇四	六七九	二二四	三〇七	四四五
米國	二〇四	二一九	二二四	二四九	二六六	三一四	三一七	八七六
瑞典	三六九	三二〇	三〇七	三一九	三五四	二六六	三五四	九八五

右を試みに圖表して一目瞭然たらしめよう。

即ち戰爭中に於て物價は

アメリカ	二倍
イギリス	二倍二分五厘
フランス	三倍半
スエーデン	三倍半
イタリア	四倍

となつたのである。我日本も米國より少し大なる騰貴を見た（米國一九六日本二二五）



となつたのである。我日本も米國より少し大なる騰貴

- アメリカ 二倍
- イギリス 二倍二分五厘
- フランス 三倍半
- スエーデン 三倍半
- イタリア 四倍

即ち戦争中に於て、物價は

右を試みに圖表して一目瞭然たらしめよう。

同 四月	一九二〇年 一月	同 七月	同 七月	一九一九年 一月	英國	佛國	伊國	米國
三〇六	二八八	二五三	二三九	二一七	三四九	三三五	三二五	二〇四
五八六	四八九	三八三	三五〇	三三九	三九〇	三六三	三一九	二〇四
六七九	五〇四	三九〇	三六三	三三九	三九〇	三六三	三一九	二〇四
二六六	二四九	二三四	二一九	二〇四	三九〇	三六三	三一九	二〇四

三 經濟危機と經濟恢復

3 4 5 6 7 8 9 480 1 2 3 4 5 6 7 8 9 490 1 2 3 4 5 6 7 8 9 998 999

五。

最低が米國最高が伊國而してドイツの戦争の終年に於ける物價騰貴は米國と日本との間にあるので(二〇三)英國よりも其騰貴は甚しくなかつたのである。これは實に著しい現象であつて、ドイツに於ける貨幣の對内價値の下落は最も少い部類に屬し僅に米國より少し多く日本より少し少ない丈けに止まつて居つたのである。戦後の第一年即ち一昨一九一九年に於てはスエーデンに於て物價が少し下落した丈けで、其餘の諸國何れも更に物價の騰貴を見た。但し米國は矢張り其割が少なかつた。即ち約二割七分其次に少いのは英國で四割一分、佛國に於ては六割八分更に騰貴を示して居る。イタリは更に二倍となつた。日本では更に二割四分の騰貴を見た。然るに昨年四月に於ては物價は戦前の其れに比して、

アメリカ

二倍七分五厘

イギリス

三倍

スエーデン

三倍半

三 經濟危機と經濟恢復

一四六〇

フランス 六倍
イタリー 六倍七分五厘

となつて居る。之に對して日本は二倍九分となり、ドイツは實に十倍となつて居るのである。換言すれば英貨一磅は戦前の六志三分の二、佛貨百フランは僅かに十七フラン、伊貨百リールは十四リール七十センチジミ、米貨百弗は三十七弗八十仙（此割で計算すれば日貨一圓は三十四錢六厘）となつたわけである。而して獨貨に至つては今日百マルクは僅に十マルクばかりにしか當らぬ勘定である。實に驚く可き貨幣價値の暴落で、十六世紀以來始めての事である。

七

右にあげた物價騰貴は、總平均に就て示したものであつて、其の非常なる騰貴は英佛獨共に原料品の側にあるので、食料品は之に比すれば遙かに低いのである。即ち、オイレソブルヒの研究の結果によると左の如くなつて居る。

年	農 産 品			礦 産 品		
	英	佛	獨	英	佛	獨
一九一三	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九一四	一一〇	一二三	一一一	一〇〇	九七	九九
一九一五	一四一	一二六	一五五	九〇	一六四	一一一
一九一六	一七二	一七〇	一七六	一一九	二三一	一〇九
一九一七	二四八	二四三	一九八	二三五	二九一	一二二
一九一八	二二〇	二九八	二一九	二九九	二八三	一五九
一九一九	二三一	三三三	三八〇	二八四	二七一	四九三
食料品	一〇〇	一二七	一〇〇	一〇〇	一四五	一〇〇
原料品	一六二	二一七	二〇五	二八四	二八九	三八四
	一九一七	二七一	二八四			
	一九一八	二七一	二八四			

二 世界を脅かす國家破産の危機

一四七

一九一九	同 一月	三〇一	三七九
同 四月	三二四	三二九	
同 七月	三二六	三五五	
同 十月	三三二	四〇三	
同 一月	四二四	五二一	
同 四月	四八八	六九二	

ドイツに就てはオレンブルヒは更らに左の數字を示して居る。

農 産 品	鐵 産 品	合 計
一九一四	一〇〇	一〇〇
一九一五	一五八	一四〇
一九一六	一五五	一四六
一九一七	一六三	一五七
一九一八	一八〇	一八〇
一九一九	三一三	四五〇
同 一月	二〇一	二六五

而して此れには種々なる原因もあるが其最大なるは貨幣の對外價値の下落此である。今其下落の有様を示す爲めに、エールの『本位下落と瑞西』に掲げた數字に私が手に得た限りの最近の數字を加へて左表を作つて置く。

スイツツル對諸外國爲替相場表

平 準	一九一九年 一月爲替相場	一九一九年 十二月同上	一九二〇年 一月二十三日 二十七日最低	一九二〇年 十二月十七日 最近
米 貨	一非に對し 法 瑞貨五・一二八	五・一八	五・六〇	六・五六
英 貨	一磅同 法 同二五・二三五	二五・二一	二一・三〇	二二・〇七
佛 貨	百佛法同 同〇〇・〇〇	一〇〇・二二	五一・四〇	三九・五五
白 貨	右 同	九九・五〇	五二・九〇	四一・三五
伊 貨	右 同	九九・七〇	四二・〇〇	二三・四〇
獨 貨	百馬克同 同三三・四五七	一二三・二〇	一一・二五	五・二五

即ち最近佛白獨貨幣の對瑞貨價值は、平準に對し佛貨は四割、白貨は四割二分、伊貨二割四分、獨貨は僅かに八分にしか當らないのである。スイツツルの物價も二倍半強になつたのであるから、瑞貨の對内價值は戰前價值の四割に下落して居るわけである。其瑞貨に對して此くの如き有様である。

ソコデ、右と比較對照する爲め米國ニユーヨーク最近爲替相場をあげて見よう。これは本年一月一日のブラッドストリートから取つたのである。

	平準	一九二〇年十二月三十一日ニユーヨーク相場
英貨	一磅に付 四・八六	三・五二%
佛貨	一法に付 一九三	五・八七
伊貨	一リラに付 一九三	三・四七
獨貨	一馬克に付 二三・八	一・三七
瑞西貨	一法に付 一九三	一五・二六

即ちスイツツル貨も米貨に對しては、平準一九三に對し一五・二六の相場で約八割弱とな

つて居る。英貨も四・八六の平準に對し三・五二%で約七割に下つて居る。佛貨は僅かに三割、伊貨は一割八分、獨貨に至つてはたつた六分弱に下落して居るのである。更らに之を我邦の爲替相場に就て換算して見ると左の通りである。
(米貨は平準二〇〇六が二〇五六の相場であつた)

	平準	本年一月四日の相場	七割五分
英貨	一磅に付 四・八六	三・五二%	七割五分
佛貨	一法に付 一九三	五・八七	三割二分五厘
獨貨	一馬克に付 二三・八	一・三七	六分三厘強

此くの如くヨーロッパ諸國は、其貨幣價值が對内よりも對外に於て更らに甚しく下落して居るのである。戰爭中は對外價值の下落は對内價值の下落よりも寧ろ小であつたのに、戰爭後殊に近頃になつて佛、白、伊、獨(露、境は云ふ迄もなし)總ての國に於て、其本位貨幣の對外價值が更に著しく暴落した。エールから再び對瑞爲替相場表を引いて見れば左の如くである。

三 經濟危機と經濟恢復

年	月	佛貨	白貨	伊貨	獨貨
一九一九年	一月	九〇・四五	八四・二五	七六・九五	五七・四〇
	二月	八七・六五	八一・一五	三七・六五	四八・四〇
	三月	八三・六〇	七七・五〇	六四・六〇	四五・四〇
	四月	八一・六〇	七九・〇〇	六五・二五	四一・〇〇
	五月	八一・〇〇	八一・五〇	六一・五〇	三六・五〇
	六月	八四・四〇	七三・四〇	六七・六五	四一・七五
	七月	七六・二五	六八・四〇	六四・一五	三二・二五
	八月	七〇・二五	六六・二五	五八・四〇	二六・九〇
	九月	六七・〇〇	六六・九〇	五六・七五	二二・七五
	十月	六三・三五	五九・一〇	五一・五〇	一八・〇〇
	十一月	五六・四〇	五二・九〇	四四・五〇	一二・五〇
	十二月	五一・四〇	四一・七五	四二・〇〇	一一・二五
一九二〇年	一月	四二・五〇		三六・二五	五・二五

八

本位貨幣の對外價値の下落と云ふ事は種々なる作用を有するがドイツ、フランスに取つて最も困る事は戦争の爲めに物資の供給が非常に減少し是非外國から輸入をしなければならぬのに、外國から輸入をしようとするれば非常に澤山の自國の貨幣を拂はなければならぬ事である。之が爲にドイツはイギリスの海軍に依る封鎖は明けたと云つても爲替相場の上にて依然として封鎖されて居るのである。ドイツがイギリスやアメリカを始め外國から品物を買はふと云ふ時には、其本位貨幣の對外價値が下落した爲に非常に澤山の金を拂はなければ買ふ事が出来ない。其半面に於ては、ドイツから輸出する事は大變仕好くなつた譯であるけれども、輸出する物がなければ輸出の便宜が加はつたと云つても何にもならないのである。國の貿易は輸入に利があつて輸出に利があるのではないと云ふ事は、今更云ふ迄もない事である。唯國に金貨を保持して置く必要上輸出超過を喜んで居るのであるけれども、是は變態であつて健全なる國殊に其國の富を増進

二 世界を脅かす國家破産の危機

して行く上に於ては輸入超過が常態であらねばならぬ。我邦の如き若くは戦争前に於けるアメリカの如き輸出超過を喜んで居るのは、未だ其國に夫れ丈け幼稚な所がある證據である。何故ならば、國民を養ふべき所のものは金貨若くは自國の輸出品でなくして輸入さるゝ所の品物にあるからである。

ドイツ、オーストリアやフランスの國民は、其の生活を支ふべき必要の物資を切に要するのであるが、國內の生産は此需要に伴はないので、是等生活の必要品は外國から得るより他に途はないのである。然るに之を得んとするに當つては、何れも自國の本位貨に換算して代價を拂はなければならぬのであるが、本位貨幣の對外價値が暴落し、而も對内價値の暴落よりも甚しい爲其支拂ふ價が非常に高くなつた故に、之を外國から得る事は甚だ困難である。其困難さはドイツの場合に於ても、フランスの場合に於ても對内價値の下落より對外價値の下落が遙かに大であるが爲めに、更らに一層痛切に感ぜらるゝのである。即ち到底外國品には手が出ないと云ふ状態にあるので、輸入が出来なければ隨つて輸出も出来ない譯である。此ドイツに對して日本は非常に有利なので、日本の留學生

等は今や殆ど成金の状態に在つて、日本から貰ふ金は左程でなくとも、マルクに換算すれば莫大な高になる。従つてドイツの物價が騰貴したけれども、爲替換金として受取る高が非常に多いので大變裕な生活を爲しつゝあると云ふ。其半面に於てドイツの國民が非常に苦しい生活を爲しつゝあると云ふ事が分るのである。例へば最近接手したドイツの官吏の俸給令を見ると（一九二〇年六月二十日發布、ウルテンベルヒ國官報）國務大臣の年俸が三萬五千マルク、次官が二萬五千マルク、在外公使が二萬二千マルク、大學の正教授が一萬一千二百マルク乃至一萬六千八百マルク、大學助教授が九千七百マルク乃至一萬四千五百マルクとなつて居る。之を日本の金に換算して見ると、一馬克三錢として、國務大臣でも年俸一千五十圓、次官が七百五十圓、在外公使が六百六十圓、大學教授の最高が五百四十圓、助教授の最高俸が四百三十五圓で、助教授の最下俸になると二百六十一圓と云ふ事になる。是は俸給令が改正されて非常に引上げられた高であるので、恐らくウルテンベルヒ以外の國に於ても大差ない事と思ふ。無類飛切此上なしと云ふ國務大臣の俸給が一千五十圓である。日當三圓五十錢の大工が月に五日づつあぶれるとしても、一

か年には此れだけ取れるのである。尤も是には多少の割増金は附くけれども其割増金と云ふのは一萬二千五百マルク以下の俸給に限るとしてあるから、夫れ以上の俸給者には及ばないやうである。

フランスのフランの對外價值はドイツのマルク程下落はしないが、戦争前日本の四十錢に當つたものが今は十何錢にしか當らないので、ドイツに於ける程ではないけれども、外國品に對しては同じく購買力が甚だ少いのである。

世界に於て最も購買力の強い國民であつたヨーロッパ大陸の諸國が皆斯様な状態に置かれて居るので、其結果は是等國民の生活の困難と國際貿易の停滞との二つに現はれて居る。貿易は買人がなければ行はれない。此場合は買人はあるけれども買人に購買力がないのであるから賣たくも賣れないのである。其結果は世界的不景氣を來す、此不景氣なるものは、戦争前に於ては周期的に景氣が好いかと思ふと不景氣が來、不景氣かと思ふと又景氣が好くなると思ふ風に廻り持たつて居つた。今日の世界的不景氣は殆ど絶望的に周期的であると同時に固有的である。此状態にして改まらざる限り、世界貿易

の不振と云ふ事は取除かれるに途がないのである。是は我邦等も廻り廻つて其作用を蒙つて居るのである。『何時景氣が恢復するでありませうか』『財界の前途は怎の程度迄樂觀して好いでせうか』と云ふ問は屢々我々の耳にする所であるけれども、若し右の事實を少しでも考へたならば左様な愚問は到底出て來なかるべき筈である。即ち今やヨーロッパを襲ひつゝある國家破産は國家財政上の破産でなくして國家の基礎の破産である。國家破産と云ふよりは寧ろ國民の破産である。國民經濟生活全體の破産である。茲に於て先づ第一に考ふべき事は、何故に各國貨幣の對外價值が右の如く戦争が終つてから暴落するに至つたかと云ふ事である。其原因の一は、戦争中は各國共人爲の調節策を行つて無理に貨幣の對外價值を維持して居つた、是は財政の健全を以て誇るイギリスが眞先にやつて居つたのである。例へば日英爲替が戦争中僅か一二片の下落に止まつて居つたものが、講和が成立してから俄かに數片下落したと云ふ事は、イギリスが爲替調節策の全部ではないが大部分を止めた結果に他ならぬ。即ち戦争中既に下つて居つたものを人爲的に誤魔化して居つたので、其誤魔化しを取り去つたから歸着すべき所に

歸着したのである。又戰爭中ベルギーやフランス其他の諸國に於てドイツが濫發した紙幣の高は莫大なものである。イギリスが此度の戰爭に参加したのはドイツがベルギーの中立を保障する條約を一片の紙屑と爲たのに憤慨したのであると傳へられて居る。デイロンは之を冷笑して『成程イギリスの参加は一片の紙屑から起たが其結果はと云ふと二枚の紙屑となつて終結を告げた。二枚の紙屑とは、一は講和條約と云ふ紙屑、一は國際聯盟條約と稱する紙屑である』と言つて居る。此二枚の紙屑は其成立前に既に數億枚の紙屑を濫發させてあつたのである。ロシアのルーブルの事は無論言ふ迄もないが、イギリスの流通證券にしても、ドイツのマルク紙幣にしても、フランスの法紙幣にしても、其他何處の國の發行した紙幣にしても之を嚴正なる經濟上の立場から見れば殆ど紙屑同様のものであると言つて宜しい。所が此紙屑は數に於て斯く莫大なるのみならず、種類に於ても決して此一種に止まつて居らない、紙幣のみが紙屑でなく更にもう一つ大きな紙屑がある。夫は即ち各國の濫發した所の公債證書である。紙幣の方はまだ流通する途があつて全然無價値の紙屑にはならないけれども、公債の方は流通の力が紙幣に

比すれば遙かに少ないものであるが故に、紙屑性が更に大なるものである。思へば此戰爭は紙屑に始まりて紙屑に終り而して今や世界は此戰爭の經過中に無數に製造された紙屑の始末に弱つて居ると言つて宜しいのである。

九

其處で此紙屑の處分法として種々の事が考へられるけれども、先づ第一に紙幣たる所の紙屑を何とか處分しなければならぬと云ふ問題が識者の頭を悩ましつゝあるのである。言葉を換へて言へば、マルクなりフランなりポンドなりの對外價値の大暴落は發行した紙幣を何とかして始末するに非ざれば、到底之を恢復する事は出来ない、其處で昔流の考へを持つて居る人は、一日も早く金貨本位の昔に歸つて健全なる硬貨主義を採るべしと主張するのである。是は戰爭前迄の經濟學說で言へば、殆ど誰人も異議を挟む事を許さない位の自明の理であつたのであるが、戰爭後の今日になつては、此位馬鹿氣た議論はない。何となれば、是は到底事實出来ない相談である。各國が發行した紙幣と引換ふ

べきだけの金貨は世界中の金を集めても到底足りはしない、沈むや世界中の金を悉く集めると云ふ事は到底出来ない事である。世界戦争は種々のものに變調を來したが甚著しい一は世界に於ける金の分布の止に非常な變調を來さしめたこと是れである。戦争前はロシア、ドイツ、フランス何れも莫大なる金を國內に貯藏して財政の基礎堅實なり幣制の基礎確實なりと誇稱して居た。イギリスは國內には寧ろ少額の金貨しか保有して居なかつたが何時でも必要に應じて世界中の金を吸收し得る力を以て、世界中の金の中央市場であると云ふて誇つて居た。然るに今世界に於ける金はどうなつて居るか。と云ふと、ロシアにあつたと稱する金は殆ど一片もない。ドイツは今でも金を保有して居るけれども、是は何れ賠償金に取り去られて了ふ。其反對にアメリカに於ける金の貯藏額は殖えたし、又戦争前迄否最近迄在外正貨と稱する幽靈を引當にして兌換券を發行して居つた日本も、一月十五日大藏省の發表した所に據ると、在外正貨を引當の兌換券は一回もなくなつて了つた。而して國內に十一億以上の金貨があつて、日本銀行の發行する兌換券は悉く此金貨を引當に發行して居るので、在外正貨も當にしなれば、又法律に

依つて與へられて居る所の特權即ち一億二千萬圓だけは金貨なしに保證準備で兌換券を發行し得ると云ふ條件も利用しないで済んで居る。是に於て日本は確に正真正銘の成金國である。日本の金の保有高は非常な變化を來したものであつて、戦争中に於て左程金が産出された譯ではなく、詰り戦争前の金の分布の高が今日は變つて了つて、ない所にあるやうになつた。其半面あつた所がないやうになつたのである。

夫ならばアメリカや日本の金を吐き出せば、ヨーロッパの紙幣制度の始末が附くかと云ふと、其額は到底及ばないのである。是はどうしても自然の經濟止の作用に依つて回收する他はないので、一朝一夕に出来ることではない。即ち紙幣の整理を全額金貨本位に變へる事に依つてすべしと云ふ議論は、最もらしくあるけれども、是は是以上ない位の愚論である。日本の現在の如く金の一片に對して一片の兌換券を發行し得ると云ふ状態は、ヨーロッパに於ては最早全く問題にならないのである。即ち金を土蓄にして兌換券を發行する制度と云ふものは、一國の貨幣の發行高が極めて少なかつた戦争前に於て出來得る事で、規模の小さい日本の國の如き状態に於て出來得る事であるが、ヨーロッパ交

戰國のやうに非常に膨脹した状態に於ては、到底考も及ばない子供敷しの愚論である。其處で其反對の説が出て來て居る。即ち金を貨幣とする事を全廢すると云ふ議論で之を稱けて金廢位説と云ふ。此論を最も有力に唱へて居るのはドイツの學者でリーフマンと云ふ人である。大要は一月二月の太陽に宮田君の手に成る紹介文が載せてあるから夫を見て貰ひたい。リーフマン程ではなくとも金の廢位を主張する論者は澤山ある。其動機は様々であるが、リーフマンの如きは、金を一國の貨幣制度の土臺にして置くとは、即ちイギリスの奴隷となる所以である。金を幣制の土臺にして居る限り、其國はどうしてもイギリスの羈絆を免れない、イギリスの羈絆から免れる事は金本位を廢止して、イギリスに一泡吹かしてやる事であると言つて居るが、是は確に一面の眞理を傳へて居る。日本が金貨本位になつたのも、又他の國がさうなつたのも自國の必要から來たのではなく、イギリスとの商賣上の關係を滑らかならしむるが爲である。イギリスが金貨本位であるから、此金貨本位國と商賣するには金貨本位でなければならぬが故に、各國共續々幣制を改めて金貨本位を採用する様になつた。然る場合はイギリスが中心であり、イギリス

を大宗と仰ぐことは免れない所である。而して金を廢して了へば、此點に於てイギリスの支配を免れる事になるは言ふ迄もないが、乍併其金本位制度の大宗であるイギリスは、既に完全なる意味に於る金本位國でなくなつて仕舞つて居るので、寧ろ今日では日本や米國の方が本當の金本位國である。此金を廢位と云ふ事は偉い議論として事新らしく傳へらるゝ如く聞えるけれ共、事實に於てアメリカと日本を除く他の諸國は金を廢して了つて居る。イギリスに於ては戦争前國內に金貨が流通して居つた。此點に於ては日本は遙かイギリスに劣つて居たと言はなければならぬ。日本の民間に於ては金貨が流通して居らない。十一億幾らある金貨は、日本銀行の藏に仕舞はれてあるので、民間には影も姿も見えない。イギリスやドイツに於いては金貨が流通して居つた。然るに戦争が始つて以來はドイツは無論イギリスに於ても、一片の金の影も見えなくなつて了つて補助貨の他は悉く紙許りになつてゐるといふ。今日も無論さうである。事實に於て金の國內の流通は廢されて居る。従つて今問題となるのは國際關係に於て金を廢すると云ふ事のみである。是は果して出來るかどうが大問題である。國內流通に於て金を

悉く廢した諸國と雖も、まだ國際關係に於いては金建として居るのである。本位貨幣の對外價値の下落と云ふことは、是れは金に換算するからこそ目に見るのである。併し現に換算しなくとも對外價値の下落と云ふことはある。否外國貿易に於いて金の授受されると云ふことは全體の輸出入額の極めて一小部分に止まるので、大部分は品物の取換であるのである。今ヨーロッパ諸國が外國から品物を買はうとする時には、自國品に對して戰爭前に較べれば其の十分の一が遙か少ない商品しが買へないのである。そして其の存糧を唯だ金貨の價値に引直して言ひ現はしたに過ぎないのである。夫れで金貨に引直すと云ふことも、矢張り本位貨幣の下落と云ふことは事實として現存して居るのである。然るに今國際關係に於て金を廢する事に依つて、此事實が取除かれるかと云ふと夫は決して出來ないのである。間接に作用はするであらうけれども、直接の作用はしないのである。何故ならば直接の事實として國際間の貿易の大部分は品物と品物の取換に依つて行はれるのであつて、其品物の取方に於て例ばドイツの品が不當に安く外國に引出される、反對に外國の品は不當に高くなければ買へないと

云ふ事である。

十

故に茲に又一部の論者があつて、金の廢位と云ふ事は此事實を著しく變化する力はない。本位貨幣の對外價値の恢復と云ふ事は、單に金や紙の問題ではなくして、抑も國の依り立つ經濟上の立場の根柢に觸れなければならぬのである。故に甚だ逆遠であるけれども、自國に於ける生産高を増すより他に方法はないと主張する者がある。是も却々有力な議論として行はれて居る。併し乍ら議論としては有力であるけれども、實際の施設として考へて見ると極めて迂遠である事は言ふ迄もない。自國の産業を發達させて、生産高を多くすると云ふ事は、何れの場合に於ても好い事であるが、右から左に直ぐ行はれるものではない。之を行はふと云ふには外國から原料品なり器械なり、生産必需品を輸入しなければならぬ。輸入しようとして云ふには、今言ふ通り高くなれば買へないと云ふのであるから、抑も始めから仕事が出来ないと云ふ存糧に置かれて居るのである。問題は

貨幣制度の問題の如くにして實は貨幣制度の問題ではなく、國民經濟と國民經濟との關係の問題である。金の廢位と云ふ事は暫く論外とし、又生産を殖やすと云ふ様な遠い先の事は暫く置いて、今目前の此問題をどう處理すべきかと云ふと是に就てはヨーロッパの識者は殆ど施すべき術を知らない實際上に於てのみならず、考の上に於ても名案が浮んで來ないのである。之が國家破産若くは國民經濟の破産、當面の第一問題である。

第二は前にも一寸言つた如く、各國の公債の始末、各國の背負つて居る莫大な借金をどうして返すか之れである。借金を返さうと云ふには新たに借金をして借替するか、國民から租税其の他の形に於いて國庫へ上納する高を殖やして夫れで支拂ふか其の二つとも出來ないとすれば踏倒して了ふか、此の三つの他に方法は無い。所が各國とも前に擧げた如く莫大の高を貸借した居るので、是以上貸借をする餘地はない。であるから、第一の方法は無論問題にならないのである。第二の方法の國民から現在以上の上納を取る、と云ふ事も餘程困難である。イギリスは戦争の始めに於ては成丈け借金に依らないで、國民からの租税に依つて戦費を支辨しつゝあつたのであるが、夫もホンの束の間で戦費

の大部分はイギリスも借金で辨じて了つた。尤もイギリスはアメリカから八億四千二百萬磅と云ふ莫大の高を借りて居るが、アメリカ以外からは借りて居ない、其處はイギリスの好い所なので、イギリスの富を以てしては八億四千萬磅の借金は差程苦痛ではなからう。併し是は外國に對する債務であつて、國內に對するイギリスの債務は非常なものである。最近の數字を擧げて見ると、昨年十二月に於てイギリスの借金總額は七十八億二千四百萬磅で、假り一磅八圓とすると六百二十五億圓許りに當る、莫大の高と言はなければならぬ。是丈けに對して年々利息を拂つて行かなければならぬのである。最も富んで居るイギリスですら右の如くであるから、フランス、イタリアに至つては到底比較になり得ない程の窮狀にある。ドイツに至つては尙更の事である。

其處でイギリスに於いて有力な議論とし起つて來たのは、公債を踏倒して了へと云ふのである。併し流石はイギリス人であるから、公債を踏倒すと云ふやうな露骨な言方はしない。之を公言したのはロシアのボルシェヴィキである。英國に於いて行はれて居る議論も事實に於いては公債踏倒論である、唯夫をオブラードに包んで居る。其を名け

て『資本徵收』と云ふ。曰く、借金を返すには資本を徵收する他はない。其方法としては種々の事が言はれて居るが、最も分り易く言へば略ぼ斯うすべしと云ふ。即ち或る程度以上の財産を持つて居る者を調べて、其財産の何割かを國民から政府の手に移すのである。移すと云ふて必ずしも品を動かすと云ふ意味ではなく有の儘で構はない。不動産なら不動産で、其處にある儘で唯權利を移すのである。而して政府は斯くの如くして徵收した不動産を右から左へと公債の償却に當てる。例へば茲に或る金持があつて政府の公債を百萬圓持つて居る。彼の財産は數千萬圓で其何割かに當る。例へば百五十萬圓の財産を徵收されたとすれば、其百五十萬圓の財産は或は工場であり、建物であり、或は敷地であり、或は株券であるとか種々の形になつて居る。夫を政府の管理に移す。而して政府はお前は公債を百萬圓持つて居るから夫丈け返してやらうと云ふて、百萬圓に價するもの丈けを返してやり、後の五十萬圓は政府に徵收して置いて、更に他の公債所有者に、お前は公債を五十萬圓持つて居るが彼の財産が五十萬圓あるから夫をお前にやると云ふ。斯くの如く現金を授受しないで財産を右から左に移して公債を返して行くと云

ふので、名は公債の償却であるけれども事實は資本の沒收である。最初百五十萬圓取られて百萬圓返されれば五十萬圓取られた事になる。又百萬圓の公債を持つて居る者が、百萬圓の財産を取られて、公債に對して百萬圓を返されるのでは出す入らずで財産は始めの状態と變らぬが、公債に應じた百萬圓と云ふ金は返されなくなる。詰り公債踏倒である。表面露骨には言はないで種々の工夫が案出されて居るが、如何なる工夫を凝しても、煮詰れば資本徵收であつて、此議論は學者政治家實業家等で盛に唱へる者があり、他方には熱心に之に反對する者もある。一時却々喧しかつたが、此頃は大分沈靜に歸した。沈靜になつたのは論すべきを論じ盡して、了つた形にあるので、反對論者の中には、开塵廻り諱い事をしないで、公債踏倒は明かに公債踏倒と言つてやつたら好からうと云ふ者もあり、又如何に國家非常の場合と雖も、私人の財産を唯沒收すると云ふ事は甚だ怪しからぬ話だと言つて反對する財産擁護論者もあるが、如何に財産擁護論者と雖も個人より國の方が重いと云ふ事は覺悟して居る。國が立行かなくなれば國民がどうかする外はない。此問題は元金の償却で何も今眼前に迫つたものではなく、夫々償還期限もあり之れを無

期限にしても出来ない事ではないのであるけれども、今直に困る問題は利息の支拂である。六百億圓の公債額の利息は五分として三十億圓になる。是丈は年々國庫の歳出を要するのでどうかしなければならぬ。ソコで元金を踏倒すより、眼前の利息を踏倒したら好いだらうと云ふ説もある。無論さう露骨には言はないが利息の踏倒をやれと云ふ事は、今迄傳つて來た學説から見れば確かに國家破産である。公債全部の踏倒でなくとも一部分の踏倒、即ち公債の切下げも國家破産の一部分と見做されるのである。

十一

以上は二つの大きな項目であつて、此外まだ擧ぐれば澤山ある。其主なるものは戦争の爲に死んだ者の遺族扶助廢兵に對する恩給年金等であるが其の高も實に莫大なもので、殊にイギリスの如きは戦争に喜んで従事せしむる爲に此手當の高を非常に増したのである。其結果は今日に於て莫大の歳出となつて居る。況んやフラ

ンス、ドイツの如き今日は、最早議論の時期でなくして實行の時期である。其最も極れるものが最近海外電報に現はれたオーストリアの身代投出となつたのである。是は既に今日を待たずとも講和條約當時に分つて居つたので、ケーンズの右擧げた書物の中にオーストリアからは一錢も賠償金は取れない。無理に取らうとすれば、オーストリアは破産を來す。オーストリアが破産すると云ふ事は、應てヨーロッパの破産を伴ふとある。是れは先見の明と言へば言へようが、是は殆ど先見と云ふ値打のない位自明の事實であつたのである。私は講和條約成立の時に、オーストリア或はドイツに就いても、若し聯合國が其當時揚言して居つたやうな方針で講和條件を課するならば、ドイツ、オーストリアは破産の他はない、否破産する事は彼の國々に取つて最も賢い方法であると公言して置いた。幸か不幸か、ドイツの當局者は未だ身代投出と云ふ決心をしないやうであるけれども、極く冷靜に局外から考へて見ると、ケーンズの言ふやうな條件にでもすれば兎も角、然らざる限り而して最近の海外電報に依れば、國際最高會議に於てはフランスの主張が通過して、ドイツに對して少しも緩和的態度を示さないものと思へるが、若し果して然ら

ばドイツが身代を投出すことは、最早豫言の境を超越して單純なる時期の問題であらうと思ふのである。其の身代を投出してからどう云ふ風になるかと云ふ事は、即答することが出来ないが思ふにオーストリアのやうに一切を國際聯盟に御任せすると云ふやうな意氣地ない投出方はしないで、もう少し手應へのある投出方をするのではないかと思ふ。

世界が赤化するの、過激化するの、其に對して軍隊の力を以て防ぐの、或は宣傳の力を以て豫防するの等と呑氣な事を言つて居る人がある他方には、實際の事實は斯くの如く着々と進行しつつあるのである。長い間の事を見れば思想の赤化と云ふ事は恐るべき事であるかも知れないが併し我々實際生活を觀察して居る者から言へば、夫よりもつと恐しい事は事實の赤化である。事實の赤化とは、歐洲各國の身代投出し、即ち歐洲の國家破産、國民經濟の破産是である。從來の財政學經濟學の意味に於ける國家破産は前にも言つた通り幾らも例のある事であつて、大して恐るべき事ではないのである。一度破産した國も長からざる時間の内に其財政状態を整理し信用を恢復して居るのであるが、今

我々の眼の前に横つて居る國家破産は、左様な生優しいものではなく、一度投出したが最後、元に戻す事は殆ど考へ能はざる破産である。と云ふのは、此の投出しは、唯借金の投出し或は利息の踏倒しと云ふやうなことでなくして、經濟上財政上に於ける總ての物の投出しである。經濟上に於ける總てのものゝ投出しは、總て政治上社會上に於ける總ての投出しをも伴ひ、更に其勢は累積して行くものであつて、總てのものゝ投出しとならないとは言へないのである。是に比較して見ると、ロシアの過激化と云ふ事は遙かに危険が少ないと言はなければならぬ。成程ロシアに於ては私有財産の強制沒收もやつたし、借金も踏倒しもやつた。併し乍ら之を斷行したレニン政府は、兎に角今日迄ロシアの秩序を曲りなりにも維持して居る。明日のことは分らぬが、今日迄は確かにさう言へるのである。然るにロシアでないオーストリアなりドイツなり而してフランスなりが身代の投出しをするとなると夫は恐らく社會上政治上の一切の秩序の投出を伴ふであらうと考へられる。私は決してドイツの爲に辯ずる者でない事はケーンズと同じである。ケーンズは決してドイツを憫みドイツに同情するが爲めに、一切の公職を抛ち、講和委員と

手を絶ち、却つて當局者を攻撃する態度に出たのではない。彼が此大決心をしたのは、將に振り掛らんとする全般的破産からヨーロッパを救はうと云を大勇猛心から出たのであつて、イギリスの當局者が彼の著に依つて大いに動かされて居るのも、思ひ當る所があるからである。而してドイツに於て之が非常な福音として受取られるのも、勿論少しでも好いから、ドイツの負擔する義務を軽くしたいと云ふ吝な根性から歓迎するものもあらうけれども、大多數は決してさうでない。夫れは右のドイツ譯者たるボンも明言して居るし、社會主義の有力な言はゞ、穩健なる社會主義者の機關雜誌のグロツケー（鐘）に於て、様々なる論者がケーシズケイシーの此の著書に就て言つて居る所を見ても、少なくともドイツの思想界の指導者は左様な吝な根性から右の議論を歓迎して居るのではなく、眞にドイツが實行し得る條件を課して貰ひたい、左すればドイツは誠心誠意其條件を勵行し、是に由つてドイツの國民的破産を救はうと云ふ事を世界に希望して居る事は、私の疑のない所である。今やドイツ自ら決する權利は一も與へられて居らない。如何に自國の經濟を健全にし、如何に財政の充實を圖らうと思つても、聯合國にして其態度を緩和せざる限

りはどうする事も出来ない。凡ての救は外から來るのである。軍艦は取られ、商船は取られ、領土は占領され、石炭はフランスに持つて行かれ、所有物資は減され、償金は課せられる、其上外國に於ける財産は沒收される。あらゆる苛酷なる條件を課せられても、尙ドイツはどうかして其經濟力を恢復し様と焦つて居る。此固い決心があつても、ヴェルサイユの條約に於て課した條件にして改められざる限り、ドイツの經濟的恢復は到底望み得ない。今日迄秩序を保つて居るドイツ國民も、背に腹は代へられない、到底實行し得べからざる條件を課せられて、あらゆる物資あらゆる富は擧げて聯合國に持ち去られ、自國の産業を復興するにも、材料が極めて乏しいが爲に一切の努力が無効に歸する事になれば、國民的破産國を擧げて身代の投出しと云ふ事になるより他はないのである。

ドイツが斯くの如く投出せば、夫は即時にフランスの身代投出しとなる事は鏡に掛けて見る如くである。精神上に於てもフランスの人心に非常な動搖を與へる。今日フランス人はドイツの償金、ドイツの償金と云ふ事で生きて居ると言つて好い位で、戰爭中はアメリカの金、アメリカの金と言つて之を當にして辛い事を忍んで居つたが、今日はアメ

リカの金を望まないで、ドイツの金を望んで苦しい所を我慢して居るのであるから、ドイツの金が取れないとなれば、彼等を今日迄支へ來つた道德上の力は非常に薄くなつて了ふに相違ない。ドイツにして然り、フランスにして然らば、イギリスと雖も夫が爲に變化を蒙むらないとは決して言へないのである。社會主義の宣傳であるとか、或は過激派のプロパガンダであるとか云ふ小さな問題ではない。血は水よりも濃し、經濟生活の實際は百の宣傳にも優つて力あるものである。

十二

以上私はロシアの事を全然論外に置いた。夫れはケーンズも其著書に於てロシアの事を全然論外に置いたからである。ロシアの事を論ずれば以上の論點を強めるとも決して弱めることはない。殊に露國をして獨佛填に其經濟恢復に必要な原料品食料品を供給せしむる爲には、レン政府だからとて之を毛嫌するは大なる誤である。其反對に獨佛の身代投出しと云ふ事は、是又直ちにロシアの人心の上にも、ロシアの社會的基礎の上

にも大なる影響を及ぼすことは私の言を待たざる所である。『行き詰れる世界と其展開』前段と云ふ一文を公けにした後僅かの月日を経たに過ぎないけれども、最近頻々として來る外國電報は、私がケーンズ並びにデイロン等から學んだ所を愈々の確に裏書する他はない。無論是れはケーンズ或ひはデイロン一流の觀察で事の真相を悉く盡したものでないと言はるれば夫れまでである。私も寧ろ其の然らむことを切望するものであるけれども、假にケーンズの傳ふる所が真相を得て居るもの、又は真相に近いものとして、而して是れに就いて打立てた所の私の杞憂が幾分にも當つて居るものとするならば、我々は社會改造生活改善とか云ふやうな比較的遠い問題を考へる前に、先づ手近に迫つて居る右の問題に就いて想を廻らさなければならぬと思ふ。其爲には私が極く不十分に紹介したケーンズの右の著書が、我同胞に依つて廣く讀まれんことを切望する他はないので英文の讀める人は無論ドイツ譯も多數我邦に來て居るやうであるから、其等に就いて我邦の識者が想を潜めて研究されんことを切望せざるを得ないのである。

ヴェルサイユの平和會議に於ては我邦は殆んど何事もしなかつた。私は曾てシベリ

ア出兵實行に際して、世人が自主的出兵を云々するのを駁して、今や日本が自主的に行動すべきとは極めて賛成であるが、日本が自主的行動に出て出兵をするのは時勢遅れの事であると反對し、誰人も講和と云ふ事は言はない時に、日本が先になつて講和を主張すべきであると云ふ論を『中外』と云ふ雜誌に寄せたことがある。其の文今『黎明錄』今日の實情果して如何シベリアに出兵した始末はどうなつたか、當時出兵を盛に唱へた人々と雖も、シベリア出兵と云ふ事は甚しき愚擧であつた事を認めるのであらう。併し第二の機會はヴェルサイユ會議に於て我邦に與へられて居つたのである。人種差別撤廢を主張するの、日本としての必要の事であつたらうが、日本と云ふ國は自分の國に關係した事に許り口を利いて、直接利害關係のない事は一切を沈黙に附して居つたと云ふことを、デイロンも其著に書いて居るが、五大強國の一に列したと言つて自慢をするならば、其の自慢に相應する丈けのことをしななければならぬのである。所謂四人會議に於てクレマンソーが自國本位の我利々々亡者論を主張し、ウキルソンの薄志弱行は之れを押へることが出来なかつた。如何にも残念な事であるけれども、此の際に處して日本が何にもしな

かつたと云ふ事は、我々日本人として更らに残念なことである。ウキルソンを非難する前に、我々は我邦使節の存在の理由を問ひたくするのである。

フランスとしては、ドイツより償金を取る事が是非必要であると考へたらうし、イギリスとしてはドイツを抑へつけて置く事がイギリスの利益の爲に好いと考へたらうし、アメリカとしては正義人道と云ふ言葉だけではあるが、さう云ふ事を言ひ出した上から正義人道の敵として、ドイツを押へる事の必要を感じたであらうが、日本としては正義人道論の説法をした譯でもなければ、ドイツから償金を取ると云ふ必要もない。日本は向後二錢たりとも償金を取るべきでない。若し英佛が日本に御裾分をして呉れたら、直ちに其の金額をドイツへ寄贈すべきである。又イギリスの様に、ドイツの勃興は日本の國の存在と兩立しないと云ふ事は少しもなかつた。寧ろドイツの勃興は夫丈けイギリスを抑へる事になつて、日本の立場としては、ヨーロッパに二つの勢力が相對して居ると云ふ事は、誠に國の安全に希はしい事である。ドイツの勢を削いだ爲に英米の横暴となつて、日本は手も出ない事になつて了つて居る。此點から言つても英米の專横に對抗し、フラ

ンスの飽くなき貪慾（之れなからしめんために私は却て世界を救ふ可き者は、日本の外には佛國だと云ふ一文を公けにしたが、私の此の希望は、虚偽の勝利に酔へる輕浮なる其佛人とクレマンソーとの爲めに全く裏切られたは實に残念千萬なことである）に對抗する爲に、獨塊に最良する必要は少しもないが、道理の命する所に随つてドイツの正當なる主張は之を助けてやるには、日本は絶好の位置に居るものと考へる。今ヨーロッパに於てフランスの主張が通つたと云ふ事は、果して事實であるか否かは知らないが若しさう確定したのでなくて、討論の餘地があるものとし、日本も亦其間に参加する餘地があるものとするならば、過去の罪科を償ふべく、日本は少なくともケインズの言を玩味する丈けの用意がなくてはならぬと思ふ。ケインズはイギリスに取つては非愛國者ではなく不忠臣ではない。否、熱心に國を愛ふる餘り右の書を著したのである。最も關係あり直接の衝に當つた所のケインズすら右の如く言ふのである。況んやイギリス人ならざる我々が、今や世界を舉げてウキルソンの流の偽善の爲めに安心なる所と爲し、クレマンソーの他く所を知らない我利々々主義の餌と爲し、ロイド・ジョージの自家本位の政略主義の

犠牲と爲すに任して置かないで、幾らか理窟の通つた正義人道と迄は行かなくとも、個人間に於て尊重さるゝ所の精神に、少しでも國際關係を近附かしむるに努力する事は、東洋の君子國を以て誇る日本の正に任とすべき所であると信ずる。而して情は人の爲ならず、其は結局は日本の利益に合致する事と思ふ。若しヨーロッパ諸國が身代を投出し國家破産が普及する時には、經濟上に於て日本が被る影響は小なるものではない。蠶絲救濟の米價調節のと言つて騒いだ所で、世界の氣勢が段々悪しくなつて行き、世界的不景氣が何時迄も恢復しない限り、日本の貿易振興等と云ふ事は考へられない事である。産業政策と云ふ上から見ても、算盤の打算の上から見ても、日本は國際聯盟會議に於て、今少しく存在の理由を示すに足るべきことを爲すべきである。何時迄もタイムスを唯一の教科書として、世界はアングロサクソン民族の獨壇場たる可べき筈と云ふ迷信に囚はれて安心して居る可きではない。 (1913.11)

|| 大正十年三月『實業之世界』掲載 ||

三 米國に於ける排日の根本的原因

カリフォルニア州に於けるイニシエチーヴ土地法案の裁決も間近に迫つて居る。之れに對しては、米國に於いても盛んに議論が戦はされ、我邦に於ても種々なる議論がある様であるが、私は此問題に就いて世上の所謂輿論とは全く異つた意見を十數年前から抱持して居て、我邦人の米國に對する考へ方なり態度なりを、根本的に變更す可き大なる必要があると深く信するものである。今此機會に於て此の卑見を少し陳べて、反省を促したいと思ふのである。

米國殊にカリフォルニア州に於ける米國人の outfah は、無理である亂暴である様であつて、日本國民の憤慨するのも無理でない、カリフォルニア州に居住する日本人から云へば、常に不安の生活を送つて居るわけである、誠に同情に堪へない次第である。私は會つて歐洲から米國を通過して日本に歸つたが、其際は、バークレーやサンフランシスコでまだ排日の聲を聞かなかつた。只、日本人中如何はしい風俗をしてサンフランシスコの街をあるくものがあるとか、共同水泳場に於いて、婦人水泳場で悪戯したものがあつたとか云ふことで、日本人に對する非難を聞いただけであつた。バークレー大學では少しも日本人を排斥せざるのみならず、私が參觀した時などは非常に觀迎して呉れ、其の待遇歐洲大陸の大學と異ならず、愉快なる見物をなしたことを記憶して居る。併し其の時私は、日本人がカリフォルニア州に於いて殖える事を、私が米國人ならば、かなりな大問題として考へなければならぬと感じた。其の後、學童排斥問題が起つた時、私は二十年前にサンフランシスコを通過した際抱いた感想に基き、社會政策學會第三大會に於いて意見を陳述した。其の意見は大略次ぎの如きものであつた。

私は社會政策を單に學問上から研究するのみならず、心の底から一種の信仰として奉

じて居るものである。此の立場から米國の移民問題を考察すると、我が國人が觀察して居る所には少なからず無理がある。日本人は米國人のみに無理があり、日本人には道理のみがある。然るに米國人は種々の口實を設けて、日本人の道理ある言分を少しも採用しないと思へて居る。成程米國に於ける實行に現はれた所は、亂暴であり、無理であることとを認めるが、其の亂暴、無理の根柢には、大きな道理があることを認めなければならぬ。其の大きな道理は、議論として主張しても實行は認められないので、米國人があせつて道理を貫徹するために手段を選ばない事になつて、其の結果が日本人から見れば無理亂暴と見えるのであらう。然らば其の大きな道理と云ふのは何んであるか。

社會政策と云ふものはカルタで建つた家（ハウス・オブ・カード）の如きものであると信ずる。換言すれば一種の人爲の制度であつて、自然の運行に任せて置くものではない。今日の經濟組織では、自然の運行に任せて置いては強者が弱者を虐げる。そこで、社會政策を以て弱者を保護し強者を抑へ、五角の地位に立たしめやうとするのである。之れを米國に就いて見ると、米國では資本家の勢力が頗る大である。労働者に對する資本家の勢

力は日本では考へられない程大である。然るにまた米國では労働者の社會政策的勢力が大であつて、労働者は團結して資本家に對抗し、其の結果労働條件が高められて今日あるに至つたのである。米國の労働賃銀は、歐洲の労働者賃銀に比して高く、英國の労働賃銀に比してさへもなほ高い。世界中オーストラリアの労働賃銀を除けば、米國の労働賃銀が最も高い。而して米國の労働者の生産能率も亦頗る高い。米國の高い労働賃銀は、高い能率によつて支持せられて居る。それが米國の労働者の平均的生活を今日の高さに引上げて居るのである。併し米國の労働者の高い生活程度は、労働者の社會政策的團結の力により、また米國の國家が社會政策的團結を承認し、進んで之を支持する事によつてのみ得らるゝものである。若し社會政策的團結が緩み、または打破される時は、米國労働者の生活程度を今日の状態で維持することは困難である。

二

何處の國にあつても、資本家は多くは近眼者であつて、三十年、五十年に亘つての能率の

増進よりも寧ろ目前の生産費低減に目を注ぐものである。米國の労働者の高い賃金は、資本家が心から喜んで拂つて居るのではない。たゞ百般の事情之れを甘受せざるべからざるが故に、已むを得ずして拂つて居るのである。それであるから、若し機會があれば、資本家は之れを逸せず、其の間隙に乗じて少しでも賃銀を引下げんと努めて居る。之れひとり米國に限らず、總ての國家に於ける今日の經濟組織下の資本家を支配する心理である。故に労働者たるものは嚴密なる注意を以て、少しでも社會政策的運動に緩みを生ぜしめない様にしなければならぬ。彼等が有する生活程度は、數十年間苦心慘憺して漸く得たものであるが、一度得たからと云つて、安心して自然の成行きに任せて置いて宜しいものではない。日刻々之れを脅かさんとする力が強大に働いて居るが故に、労働者たるものは細心の注意を以て、乘ぜらる可き間隙を作り出さざる様努力する事が必要である。英國、オーストラリアの如く労働者の社會政策的團結の強い國家にあつては勿論、其の團結力の強くない歐洲大陸諸國でもさうであるが、就中米國に於いては此必要が特に大である。何となれば米國の労働者の生活程度は歐洲の労働者に比して餘程高く、而

して米國の産業上の競争の相手は米國よりも低い生活程度を持つ労働者を使役する歐洲の工業産業であり従つて米國では、此のカルタの家（ハウス・オブ・カード）たる社會政策的産物を打破せんとする力が、歐洲は勿論英國に比べても遙に強いからである。米國には社會主義的思想は存在するが、實際政治上の運動としての社會主義は極めて微力である。——之は私が右の發言をなした當時に就いて言ふ事であつて、今日即ち歐洲大戦後の米國に就いては、大分異つて居ることは言ふ迄もない。——。それには種々の原因があるが、第一の原因は、米國労働者の生活程度が少なくとも歐洲の労働者の生活程度に比して高いが故に、彼等の現經濟組織に對して抱く不平は、歐洲大陸、就中獨佛の労働者のそれに比しては遙に小さいものであると云ふ事である。其他にも種々の原因がある。例へば、米國の二大政黨は、労働者の要求を尊重し傾聴しつゝあるが故に、他に新なる政黨を作らずとも労働者は其の要求を提出する事が、或程度までは可能である。且また、二大政黨對立の制度と云ふものは如何にも嚴重であつて、其の間第三黨として社會労働黨が出来る可能性が少なくと云ふ如きは之れである。——是れ亦十數年前と今日とでは事態が著し

く異つて居る——併し乍ら種々の原因の中一番強い原因は前述した如く米國の勞働者の生活程度の高い事是れである。之れは勞働者にとつて甚だ仕合な事であると共に米國全體から見ても亦一の福音たるを失はない。故に米國人として米國を思ふ程の者は、其の資本家的偏見に囚はれない限り、決して此の状態を變更すべからず、更に進んで之を確保し、常に勞働者の生活程度を高く維持して行かうと考へるとが、一つの國是として、も甚だ重きを爲して居る。従つて此大方針を打破すべき處ある事柄は、大事の前の小事として、之れを犠牲に供することを辭しない。日本との親交は、米國にとつて甚だ冀はしい事であり、支那との交際の益々密にならん事は熱心に之れを希望するとしても、其親交を維持する上に起つて來る事柄にして、右の大方針を打破する處ある時は、多少親交に害ある事實が存しても、之れは已むを得ないことと認むることは、米國人の立場として寧ろ當然と言はざるを得ない。地を換へて、日本、支那の問題として之れを考へても道理に二つはない。日本の立國の大本に害を與へる様な事柄が生ずる時は、米國との親交が如何に冀はしくとも、前者を探つて後者を捨ててゐるのは日本として理の當然である。然るに、日本

に於いては勞働者の生活程度を高く維持して置く事は國家の大方針とはなつて居ない、寧ろ反對に資本家の利益を擁護する事が國家を富ます大方針の要求する所であつて、之が爲めには多少勞働者に壓迫を加へる犠牲は、之れを忍ばなければならぬと考へて居る人の方が多數である。斯くの如き考へ方をして居る日本人から見れば、米國が勞働者の生活改善の爲めの社會政策的要求をあまりに過重して居る様に見えるのも無理はない。併し乍ら米國の問題を見るに、日本人の眼を以てするのは間違である。米國の問題を見るには米國人の眼を以てしなければならぬこと、日本の問題を見るに、日本人の眼を以てしなければならぬと同様である。

扱て、カリフォルニア州に於ける移民排斥は、無論種々の原因から生じたに相違ない。人種的反感もあるであらう、經濟的利害の衝突もあるであらう。併し、今單に社會政策と云ふ極く狭い立場から此の問題を觀察して見ると、日本移民が米國內に増加して行くは、米國社會政策上の國是に對する一危険を意味して居るものである。無論日本の移民中には米國勞働者の生活程度に劣らない生活程度を持ち、勞働者としての品性が米國の勞

働者のそれに一步も譲らないものもあるに相違ない。併し乍ら全體に就いて見ると、日本移民の生活程度は、米國労働者のそれよりも遙に下位にある。此の日本移民が少數米國に入り込む事は、必ずしも彼れの社會政策的國是を破壞する事にはならないであらう。併し乍ら、カリフォルニア州の如く多數の日本移民が入込み、其多くが若干の地域に密集居住して、或る種の農業は日本の農夫によつて獨占せらるゝ様になれば、彼等が折角數十年苦心して贏ち得た生活程度の向上は逆戻りする虞がある。必ずしも日本移民が直接に米國労働者と競争する場合に限るわけではない。異つた方面に従事して居つても、低い賃銀に甘んじ永い労働時間を以て働く多數の日本移民があると云ふことは、高い賃銀、短い労働時間を享けて居る米國労働者にとつて一の脅威となる。之れは單なる經濟上の利害の衝突とか、競争上の睨み合とか云ふ小事に非ずして、米國労働者の社會政策運動の根柢を脅かすものである。故に彼等が此の脅威を排除しようと考へ出すのは決して無理のない事であつて、此の點だけは道理は米國にあつて、日本に無いと云はなければならぬ。之れは社會政策上より見たる私の日米移民問題觀である。

右は明治四十二年十二月十九日慶應義塾大學の講堂に於ける社會政策學會第三大會に於て移民問題討議の際、報告者の一人として私の述べた所である。大要は載せて社會政策學會出版の論叢第三冊二十一頁以下にある。私が右の意見を述べた時は、全く賛成者が無く、反つて會員の或人の如きは、一種の米探論なりと云つて駁撃された。乍去私は今日なほ右の如く考へ且つ固く信じてゐるものである。

三

然るに私は、歐洲大戰以來多くの機會に於て、米國の偽善、偽正義、偽人道論を駁撃するにかなり力を用ひた。今日では米國嫌ひの一人として認められて居る様であるが、私は決して米國が嫌ひでもない。米國の偽善、偽正義、偽人道に對して憤慨するとは人後に落ちないが、併し彼に道理あり我に無理ある時は、遠慮なく公言するものであつて、何時でも身最良する考へを決して持つて居ない。米國の事とし云へば、總てがよい事ばかりと思つて居る人が、此の度の日米問題に就て米國を揚げ日本を抑へる論を書いたならば、それは

初めから囚はれたる僻見と認められても已むを得ないであらう。併し、私はさう認められることはないと信ずる。私はこの度の日米問題に就いて、米國殊にカリフォルニア州に於ける米國人に不都合、無法の數々あるを知るものである。併乍ら、其の無法、亂暴の根源、少なくとも有力なる原因の一つは、私の考ふる所では、右の社會政策的國是の維持にある。即ち之れは根柢に於いて極めて道理ある要求である。其反對に社會政策を認めず、勞働階級の向上發展を冀はず、偏へに國家を富ますのみを以て第一義とし、之が爲めには、勞働者の要求を壓迫するも可なりとする人士に取つては、米國に道理が無いと見へるに相違ない。私共の如く社會政策に重きを置くものは、寧ろ賞讃すべき事であつて、非難すべき事ではない。米國が日本に對して禮を失したのは、責めなければならぬ。併し乍ら、米國が根柢に於いて、斯くの如き國是の上に立つてゐることを日本が承認せずして、枝葉の點に就いて争つて居るのは大なる間違である。私は此意味に於て、日米問題の見方、扱ひ方を、根本的に變更する必要があると信ずる。否、此の必要は既に明治四十二年に差し迫つて居つ

た。然るに日本は、日本の立場のみを見て、米國の已むを得ざる立場を察せずして、交渉した事が、此の度の行き詰りの原因であると思ふ。

私は四十二年の社會政策學會に於いて、日本が今日反省して此米國の立場を認めなければ、學童問題は兎に角、日米間の紛争は増大すると斷言した。今日の狀態は其の斷言が事實となつて現はれたものである。明治四十二年から今日迄の間に、一千九百十三年の土地法制定と云ふ事件があつた。是れが日本が反省すべき第二の機會であつた。然るに日本は少しも問題の根本に徹底する事をなさず、外交上の手段、しかも狭い意味の自國本位の立場からのみ外交的交渉を反復した。而してそれは美事に失敗に終つて居る。これが此の度の紛争を惹き起した原因となつた。遠い原因は學童問題であるが、もつと溯つて、日本が米國の國是若しくは建國の大本に於ける社會政策の重要を認めなかつた事にあり、近い原因は、千九百十三年の土地法制定に際して抗議するに當つて、此の問題を社會政策的に觀察して對米方針を立てなかつた事にある。而して日本では、政府の當局者たると民間の識者たるとを問はず、少しも此意味に於ける問題の根柢に觸れず、當面の

問題について争はんとした。今日形勢逼迫して或は日米間に戦端を開くかも知れないまでに進んで居る。若し此の問題で干戈を交へるならば、それは日本に取つて大なる不利益である。世界の同情は悉く米國に集中し、日本は第二のドイツ若しくはそれ以上に世界の憎惡の標的となるに相違ない。明治四十二年若しくは一千九百十三年の交でも、此の問題に就いて戦争をするのは、世界に於ける日本の聲名に傷けるものであつたが、今日の如く世界が社會政策的に目覺めた事驚く可き有様である時に方つて、唯國權擴張、利權獲得主義の立場から日米間に衝突を惹き起すならば、世界に於ける日本の地位は、非常に悪いものとなる事を覺悟しなければならぬ。否、日本が社會政策的理解を十分に示した上と雖も、今日米國と戦端を開くと云ふ事は、單に日本一點張りの觀察から言つても非常に不利益である。日本は無論獨立國である。併し、世界經濟的には、日本は決して獨立國ではない。他國の力に俟つ事多々である。就中米國との貿易無くして殆んど一日も立ち行かないのである。ロシアと戦争する、ドイツ、フランスと戦争するのは、打撃は打撃であつても、日本を世界經濟的に孤立の地位に置くものではない。之に反して、米國と

貿易が杜絶する事は、日本を瀕死の境に陥れるものである。戦争の上では日本は勝つであらう。少なくとも勝算が十分でなければ、日本の軍事當局者は開戦を承認しない程の判断力を有するものと信ずる。此の點に於いては、我々は陸海軍の當局者に信頼する。故に彼等にして開戦すべしと主張すれば、我々は暗黙の間に、日本に勝算あるものと推定すべき理由があると思ふ。

併し、我々經濟生活の研究者も亦、其專攻する所に立つて國家の問題に關する意見を開陳すべき權利ありと信ずる。國と國との戦争は單に戰場に於いてのみ、艦隊と艦隊との間にのみ決せらるべからざるは、ドイツの例に徴して明白である。ドイツは兵戰に於いて敗北したと云ふよりも、寧ろ英國の海上封鎖による經濟戰（アウスフンゲルングスクリーグ（飢餓戰））に敗れたのである。而してヴェルサイユの講和談判に於いて更に、より大いに敗れたのである。此の運命はやがて日米戦争に於ける日本の運命である。海陸戰に於いて日本は勝つであらう、少なくとも私は日本國民として爾が信ぜんと欲する。併し乍ら經濟戰に於いては日本は一も勝算を有して居ない。米國の驅逐艦數隻は、石油

の供給を絶つことによつて直に日本に於ける凡ての自動車の運轉を停止せしめるであらう、日本に於ける數十の紡績工場を閉鎖するの已むなきに至らしむるであらう。大正八年末の調査によれば、カリフォルニア州に於ける日本人の数は七萬三千九百二十四人である。農業に従事する日本人は七年末の調査によれば、三萬八千八百八十八人である。極めて利己的な打算をして見た所で、此れだけの数の日本人の利益重きか、將又日本に於ける數十萬の紡績工女若しくは製絲工女の利益重きかは、言ふを俟たない所である。單に利害の打算から言へば、カリフォルニア州七萬の同胞が悉く引き拂つて米國を去るの已むなきに至るとしても、此問題による戦争を避ける方が利益である。併し是は利害の打算だけの話であつて、私は斯くせよと主張するのではない。日米開戦が日本の經濟上に何を意味するかを考へよと云ふだけである。國家の存在が危くさるゝか、日本が日本として立つ特權が侵害さるゝ場合には、國內總ての紡績工場が破産し、總ての製絲工場が閉鎖し、國民が如何に苦しむとも戦争を辭すべきではない、國民が最後の一人となるまでも戦ふべきである。併し乍ら、カリフォルニア州に於ける日本移民の問題は、日本立國の大本を

危くするものでもなければ、世界に於ける日本の特權をも傷つけるものでもない。此問題の爲めに戦争するが如きは、大なる間違である。若し米國が、世界就中東洋に於ける日本のプレステーチを侵害するが如き事あらば、それはあらゆる社會政策的要求を超越する所の大問題と言はなければならぬ。之れに反して、カリフォルニアの移民問題は、其の根柢に於いて全く社會政策的に取扱ふべき問題である。情は人の爲めならず、米國の労働階級の社會政策的要求を尊重すると云ふ事は、やがて日本労働階級の同様の要求を尊重する事である。故に少なくとも日本の労働階級は、カリフォルニア問題を以て、日米が干戈を交ゆる事には賛成しないと云ふ。否、賛成せざるべき筈である。

四

扱て、斯く言へば然らば、カリフォルニア州に於けるイニシエチーヴ土地法案に對して、日本は無爲にして手を拱いて居ればよいのであるかと云ふ人があるであらうが、さうではない。私の主張する所は、問題の見方取扱ひ方を變更せよと云ふのである。

イニシエチーヴ土地法案とは如何なるものであるかと言へば、千九百十三年カリフオトニア州議會で議決された土地法案が、事實上勵行せられて居らないのを勵行しようと云ふ案である。此の法案によると、米國臣民たるを得ざる外國人にカリフオトニア州に於いて土地の所有を許さない、又農業地の借受期間は三年に限られるのであつた。當時此の法が州議會を通過すれば、カリフオトニア州の日本人の農業は全滅すると云ふ恐を抱いたものもあつたが、事實は之に反してカリフオトニア州に於ける日本人の農業は長足の進歩をなして居る。十年前と今日と比べると殆んど倍の發達をなして居る。是れ即ちカリフオトニア人にとつて甚だ目障りである。此れ畢竟法が不備であり、法の執行が不十分であるが故に、日本人の農業が發達したのであるから、之れを抑へようと云ふのが此度のイニシエチーヴ土地法案である。此の法案の要領は第一、既に土地を有する日本人は其の權利を侵害されない。但し、其の子が日本人である場合、其の土地を相續せしめ得ない。其の子が米國で生れた場合、相續せしめ得るか否かは不明である。第二、米國で生れた日本人の子が名義人となつて土地を買入れた場合、其の親たる日本人は、事實上

其の土地の所有者として使用収益する事が出来たのを、今度は出来ないとし、右の様な場合には後見人は別に之れを定めると云ふ事にしようと言ふのである。第三、従來は社員の半分以上が米國人である會社は、土地を所有する事が出来たのであるが、今度は一人でも日本人が社員である會社には、農耕地の所有を禁じようと云ふのである。第四、借地權に就いては、個人名義でも會社名義でも借地が出来ない。但し、現に借地して居るものは、有効期間だけは差支へがない。此外細かい點があるが、大要右の如くである。右の法律改正は、全然カリフオトニア州限りとする事の出来るものであつて、米國中央政府は之れを如何ともする事が出来ない。殊に今度は全人民の投票によるので、カリフオトニア全人民を相手として争ふより外に道はないのである。然らば社會政策的に、此の問題をどう見る可きであるか。此點を考へて見よう。

元來外人に土地の所有を許さないのは、不道理とは言ひ難い。現に日本は外國人に土地の所有を許して居らない。唯問題は、米國が外國人であつても、歐洲人には土地所有を許して居り、又カリフオトニア州以外では日本人に對しても何等の禁制がないのに、ひと

リカリフオーニア州が主として日本人に制限を加へようとするのは所謂人種的差別をなすもので不都合であると云ふ點にある。成程人種的差別を立てることは不都合には相違ない。併し乍ら差別的取扱ひも事實が差別的である場合には悉く不都合であると云へない。少數の日本人が土地を所有して居る場合と何萬と云ふ日本人が密集して廣い土地を所有する場合とは同様に見るべきものではない。例へば英人も土地を所有して居るであらう。併しそれが少い場合には差支へがなくても多ければ差支へが起る、即ち事實に差別を生ずれば取扱ひも差別を立てる必要が生ずるのである。手近い例を以て言へば、日比谷公園に十人二十人集つて演説會を開くのと、三千人五千人で演説會を開くのととは同じ屋外集合でも差別がある。十人二十人の場合には公園の取縮上不都合がなくとも、三千人五千人の場合には、取縮上解散を命ずる必要が起るかも知れない。もう少し適切な例を擧ぐれば、今の日本の工場に若干少數の支那人を使用した所で、何の差支がない。併し何萬と云ふ支那人が一工場に密集して、何時間でも雇主の命のまゝに働くとすれば同じ工場の日本労働者は多くは迷惑するに相違ない。其の場合には日本労働

者はストライキをやつて其の支那人を何んとかせよと要求するに相違ない。若し支那人が日本で土地を所有することを許されるとして、何十人かの支那人が東京で土地を所有した所で、誰も何んとも云はないであらう。併し乍ら數萬の支那人が入り込んで土地を所有し盛んに營業すれば、東京市民は不平を言ひ出すであらう。其の場合、支那人の土地所有を取縮ると云ふ事は確に支那人を差別的に待遇する事ではあるが、それは直に不道理であるとは言へない。問題は事の大小の如何程度の如何にある。

五

カリフオーニア州に於ける日本人の土地所有、日本人の農業經營が僅少のものであるならば、之れを捨て置くが其の範圍が漸次増大して來れば、何とかしようと思ふのは、他の外國人に對する場合に比して差別的である。併し乍ら他の外國人が日本人に匹敵する勢力があるのに、日本人だけに辛く當ると、他に日本人と同じ程度の農業經營をやるものがない場合に、日本人を差別的に待遇するのは、事態が全く違ふのである。今米國太

平洋沿岸諸州に於ける日本人と米國人との人口を比較すれば、次ぎの如くである。

(大正七年七月一日現在)

	米國人口	日本人口
ワシントン州	百六十六萬	二萬七百十四
オレゴン州	八十八萬八千	四千二百七十七
コロラド、ニダ、 ネウイタ、三州	百五十六萬	一萬三千
アイダホ州	四十六萬	一千八百九

然るに、カリフォルニア州では全人口三百十二萬に對して、日本人は七萬三千九百二十四人である。他の諸州の事態に比して著しい相違があることを認めなければならぬ。而してカリフォルニア州に於ける日本人増加の割合は次ぎの如くである。

年次	人口
一八九〇	一、一四七
一九〇〇	一〇、一五一
一九一〇	五四、九八〇

一九一三	五九、七五五
一九一八	六八、九八二
一九一九	七三、九二四

人口は斯くの如く著しい率を以て増加して居り、而して更に農作物の種類に従つて、全耕作地と日本人の耕作地との割合を見ると、次ぎの如くである。

作物	全收穫中日本人耕作物割合
いちご	九割一分八厘
セレリー	八割九分二厘
アスパラガス	八割二分七厘
種物類	七割九分二厘
玉葱	七割六分三厘
トマト	六割六分五厘
胡瓜	六割三分八厘

即ち米國人が日常食膳に上せる重要な野菜類は、殆んど日本人の獨占と云つてもいい状態である。

今多數の支那の農夫が東京の郊外に土地を所有して居つて、其の耕作地の産物が東京市民の食膳に上る大根、漬菜、午夢、にんじん、茄子、胡瓜、南瓜などの七割乃至九割を占めると假定せよ。多町や大根河岸に出る是等の野菜類が支那人の獨占供給にかゝると假定せよ。我々東京人は果して黙つて居るであらうか。私は、差別的待遇、差別的待遇と憤慨する人々に篤と反省せられんことを求める。取扱ひの差別的であるのは悪い。併し乍ら、事實は斯くの如く差別的である。差別的であるものを差別的に取扱ふのは、一概に悪いとは言へないではないか。人種的反感が加はるにしても、それが直ちに差別的待遇の原因であるとは云へない。同じ人種であつても、差別的待遇を爲すかも知れない。東京の郊外に成金某なるものがあつて、彼は生粹の日本人であるとしよう。而して彼が廣大な耕地を占有して居つて、東京の青物市場に出る野菜の半以上を獨占供給するものであるとしたならば、東京市民は其まゝ放つて置くかどうか。差別、差別と非難するに先ちて、篤と事實の實際を考へて見なければならぬ。

私が會つてイタリアに滞在して居つた當時、イタリアの都市の電車、電燈、電力の經營、管

理はドイツのシーメンス會社、シュツケルト會社、アルゲマイネ會社等が獨占して居つた。之はイタリアに資本が乏しく、殊に當時は電氣事業經營に堪能ではなかつたから已むを得ずドイツの會社に獨占させたのであるが、多くの都市の人民が之れに對して不平を鳴らして居つたのを、私は目撃して居る。遠くイタリアに行かなくても、近い朝鮮にも斯の種の例がある。日韓合併前私が京城へ行つた時、京城の市街鐵道は米國のコールプランとか云ふ會社が獨占經營して居つた。之に對して朝鮮人ではなく、米國人と同じく外國人である所の日本居留民中に、大に憤慨して居るものがあつた事を知つて居る。獨占と云ふ事に對する憤慨は、必ずしも人種の異同によらないものである。斯る例は幾らもあるが、要するにカリフォルニア州に於ける日本人、殊に日本人の農業經營は、甚だ重大なものであつて、其の重要は長足の進歩をなしつゝあるものである事を考へなければならぬ。之れに對して米國人の爲す所には、様々都合な事、無法な事もあらうと思ふ。併し乍ら、其の無法を責める前に、事情が斯くの如くなつて居ることを篤と諒察しなければならぬのである。

六

カリフオーニア州に於ける日本人は非常に勤勉であつて、到底米國の勞働者が競争に堪へない位である。此の人々はあらゆる困難を凌いで、右に述べたる如き成績を擧ぐるに至つたので、同胞中斯くの如き健全な奮闘者を見るのは、我々が愉快の感を禁じ得ない所である。併し乍ら、立場を異にして米國人から見れば、日本人が勤勉であればあるほど危険である。其の危険は前に言つた社會政策的營造物を無視し、否、之れを破壊せんとする一の脅威と見られて居るのである。彼等は或は言ふであらう。吾々も一度勞働者の人格尊重、勞働階級の向上改善の要求を擲てば、日本人同様の成績を擧げる事が出来ない事はない、吾々は生れて日本人に劣るものではない。併し乍ら吾々は日本人の如く家畜に等しい生活をして競争しようとは思はない、吾々は何處までも人格尊重を維持しつゝ、農業に従事したい。是れが吾々にとつてハンデキャップである。左様な不當なハンデキャップを付けられたのは正義に背く、正義に背いたことを排除するには、多少正義に背

いたことをしても仕方がないと。彼等は、斯くの如き意味のことをいろ／＼異つた言ひ現はし方で主張して居るものと思ふ。

然らばカリフオーニア州の日本人が、今遽に其態度を一變して、米國の農業勞働者の如き生活をする事が出来るか否か。是れは實際の事情を知らない吾々の判断を下し得ない所であるが、兎に角米國と日本の農業勞働者間に、現に勞働條件上の差別社會政策上から見ても大なる差別の存して居る事は事實である。米國の社會政策から見ても、是非之れを取り除けなければならぬものと考へるのは、一點非難のない公明正大なる要求であり主張である。之に對して、差別的待遇を撤廢せしめようといふには、先づ我々は此社會政策上に於ける差別、勞働條件上に於ける差別を自ら撤廢してかゝる覺悟が無くてはならぬ、單なる外交談判で問題を解決せんとするのは全く間違つて居る。此の意味に於て、私は我邦の態度の變更を主張せんとするものである。それは固より一朝一夕に出来る事とは思へない。抑も人の生活上の態度を變へる事であるから、容易に實現は期し得られない。従つて差し迫つた所のカリフオーニア州イニシエチーヴ土地法案の成立を、外交談

判で防止すると云ふ事は、前後顛倒であると思ふ。日本人たるの故を以て黄色人種たるの故を以て、それだけで差別的待遇をすると云ふならば、正義人道に反するものとして抗議しなければならぬが、經濟上に於ける差別、しかも兩國民間の歴史的に成立した生活状態の相違から起る所の差別は、決して一片の抗議を以て取り除け得られるものではない。そこで私は第一に望みを問題の渦中にある所のカリフォルニア州在留同胞諸君に囑せざるを得ない。カリフォルニア州在留同胞諸君、諸君は如何にも辛い地位にある。私には切に諸君に同情する。併しながら文明國の大勢としては、勞働條件の改善、社會政策的營造物の維持は、決して逆戻りすることを許さないのである。不幸にして諸君の祖國たる日本は、此點が適かに米國に劣つて居るのである。だからこそ諸君の大美德たる諸君の勤勉が、諸君の禍となつて居るのである。これは誠に同情に堪へないが、社會政策的に純化せざる勤勉が、日本に於ては兎に角社會政策的思想の進歩したる米國に於いて、反つて一の悪徳と認められるのは、人文發展上寧ろ歓迎せらるべき事である。

我が日本は徳川時代に於いて、極端に農夫を壓迫する政策を採つて居つた。『百姓は死

なぬ様に生かして置くべし』とは、徳川幕府の立法に參與した徳川の功臣本多佐渡守が、本佐錄で喝破した所の格言である。此格言は徳川幕府三百年を通じて、幕府諸侯の農民政策の大本であつた。我々日本人は此の大本で抑へられて來た。百姓に樂をさせてはならぬ。と云つて死なしてもいかぬ。生かして置くだけにして、其以上餘裕があつたら、運上として取り上げてしまへと云ふ方針で我々は支配されて來た。然るに今諸君が農業に従事して居る所は、寧ろ其反對の政策を採る所の米國である。勤勉此上なき諸君は、多年の傳統に支配せられて、米國で死なぬ様に生きて居るのである。米國人は思ふ存分に生きるべく生きて居る。是以上の大なる差別はない。諸君は自分の力を以つて、此の差別を撤廢すべく努力しなければならぬ。自分の力以外、日本の政府などに期待を懸けてはならぬ。イニシエチーヴ土地法案が成立すれば、諸君は益々苦境に陥るであらう。此の禍を轉じて幸となすか否かは、一に諸君の力にある。之には日本の精銳なる陸海軍は、少しも諸君を援ける力を持つて居らぬ。諸君にして、今日の社會政策の根柢に徹せらるゝならば、諸君今日の苦境を轉じて、従前に優る樂境となし得るの日は必ず來るであら

う。諸君が之を爲し得ざれば、最後にはカリフォルニア州に於ける日本人經營の農業は、全滅するの日が到來するものと覺悟して戴かなければならぬ。

七

翻つて此の度の問題について、日本からプロパガンダの爲めに、特使を派遣すると聞いたが私を以て見れば、是れ冠履顛倒である。プロパガンダ教化を要するものは米國人ではない、日本人である。幸にして此の度の問題について、國民は今日までの所冷靜なる態度を失はない。侵略的軍國主義的のプロパガンダを爲す者があつても、我國民は一向動かされて居ない。併し我々は、此際一步進んで所謂日米問題なるものは、是等プロパガンダをなすものよにつて傳へられる様なものではない事を明にし、更に深く根柢に立ち入つて考察しなければならぬ問題である事を、國民に周知せしむる必要があると思ふ。即ち國民が社會政策的に目覺めると云ふ事、侵略的軍國主義的な夢から全く醒めると云ふ事が第一の必要事である。然る後、米國に責むべき事あらば飽く迄之を責むべし。米國

と戦ふならば飽く迄戦ふべし。今日の如き社會政策的に目覺めて居らない思想を以て、現下の日米問題に就いて米國と衝突する事は斷じて非である。否、斯かる考を持つて居る間は、カリフォルニア州數萬の同胞は、遂にはカリフォルニア州を引上げねばならぬ非運に陥らなければならぬかも知れない。カリフォルニア州の同胞には、飽く迄も同情しなければならぬ。併し乍ら、其の同情は單に安價な同情であつてはならぬ。否、我々國內の人間が、カリフォルニア州在留同胞に對して囑望するが如く、社會政策的に目覺めることが、禍を轉じて福となすに大なる後援を與ふる所以である。

最後に國家として當面の問題を如何に處理すべきかは、實際政治の問題であつて、私は之を論ずる資格がない。併し乍ら、自發的に今後の移民を制限するか、若しくは場合には、よつては當分米國の社會政策と兩立し得る様になるまでは、移民を中止する事を提案して、日本に野心なき事を明にし、イニシエチーヴ土地法案成立の曉には、其の不當な一解釋又は施行に對しては飽く迄抗議を申し立つべきも、米國憲法によるカリフォルニア人民の權限行使に對しては十分之れを承認し、溯つて根本問題の解決を計り、日本人が米國の

農業其他の事業に従事するに米國の社會政策と矛盾しない様にすべきであると思ふ。斯く言へば此の方針は退嬰的であり、意氣地がなく、國威に關すると云ふ人があるかも知れない。併し私はさうは考へない。抑も問題の由つて出づる所に就いて、米國に道理ある以上之れに對して如何なる讓歩をするも國家の體面に關する事はない。主張すべきは主張し讓歩すべきは讓歩してこそ眞に東洋君子國の世界に於ける使命を發揮する所以であると確信するものである。

|| 大正九年十一月號「實業之世界」掲載 ||

四 軍備制限は確かに實現し得る

華府會議の經過は如何成るかは到底分らないことであるが、軍備制限と云ふことは確かに實現し得ること、我々は堅く信ずるものである。唯だ其方法の如何に至つては専門家同志が種々に苦心を重ねることを要する。が、制限しようと云ふ誠意さへあれば、其等の技術的の問題は決して障礙を爲すものとは考へられぬ。問題は、誠意の如何にある。殊に日本の誠意如何に在る。軍備制限を眞面目に實行しようとすれば、太平洋問題とか極東問題とかを一緒に會議に上すことは、初めから斷念す可きである。此等の問題は各國の利害相反すること甚だ多いもので、其爲めに折角の共通問題の進行を害する虞がある。我々は心から軍備の制限を切望するものなるが故に、些にても其の實行に近づく機會のあることを歓迎すると共に、聊かにても其進行を害す可き處のある障礙は、初めから全然是を撤廢し置かんことを熱求せざるを得ぬものである。故に我々は、日本の全權委員が先づ會議の劈頭に此事を力説して、太平洋問題、極東問題の上程を他の機會に譲る可きことを主張せんことを希望するものである。

軍備の制限が眞面目に行はれ得るならば、太平洋問題、極東問題の利害衝突性も少しは

緩和せられる。元より軍備の全廢が實現したとて、國と國との角逐の機會はイクラも存する。否、世界に於て最も恐る可きは、所謂軍國主義ではない——軍國主義には色々な解釋が附られ得ようが、茲では、陸海軍の力を以て他國の利益を自國に占取しようとする方針の意に解釋して置く——其れよりも遙かに恐る可きは、財力侵略主義——之を資本的侵略主義と名けて置く——であつて、向後の世界に於て其最有力の實行者たる蓋然性と可能性とを持つて居るものは、言ふ迄もなく米國である。日本は武力侵略主義の實行者としては多少見込みのある國である他方に、財力侵略國としては、遠き將來はイザ知らず、近き將來に於ては到底問題となる資格を有せぬ國であることは、世界の公認する所であらう。軍備制限は先づ世界の表から、武力侵略主義の蔭をイクラカにても薄らげるものである。其れ丈けでも結構である。世界に取つても結構であるが、日本に取つて、殊に難有い次第である。若しも今日の儘に放任して置けば、日本の國力が軍備の爲めに障礙せられるとは一小事として問題外に置くとしても、日本の國是民情が段々武力侵略主義、即ち軍國主義の洗禮を受けることになる虞が大にある。財政上の困難、經濟上の損失など、

は之に比すれば寧ろ甚だ小なる害たるに過ぎない。國をあげて軍國的になると云ふことは、人間として向後の世界に於て到底堪へられないことである。日本は此點に於ては幸にも——他の點では不幸だが——貧國であるから、財力侵略國となる恐は、先々當分はない。全く無いと云へないが、多少其恐ありとしたとて、少くとも英米を向に廻して相角逐するなどと云ふ大外れた非望を起す恐はない。之に反し武力侵略國たる可能機會が與へられるときは、或は喜んで此機會を拉へるかも知れぬ。軍備制限が眞面目に行はれれば全くとは無論云へないが、其非望を起す機會は少くなる。コレ丈でも實に難有い結構な事である。

二

太平洋問題、極東問題は、其性質上武力侵略衝突の要素を含むことは勿論ではあるが、其よりもより多く、財力侵略上の利害衝突の要素が含まれて居る。所謂經濟戰の諸問題が重きを成して居る。其處置としては、單に軍備制限丈けでなく、財力侵略の問題がある。此

四 軍備制限は確かに實現し得る

は其性質が複雑であつて、軍備制限の様に技術的に取扱ふこと困難である。これは當然後廻しにせらる可きものである。我々の考へでは、世界が今後若干時期の間アングロサクソン民族の財力横暴時代の下に立つことは、如何にしても免れ難い運命と思ふ。一兩日前政教社からコロムバス時代に日本人が米大陸を發見したとしたら米大陸は今如何になつて居らうかの間に對する答を徵せられた。私は之に對しては粗次の如く答へて置いた。日本がコロムバス時代に米大陸を發見したとしても、米大陸は決して黄色大陸とはなつて居らないであらう。恐らく米大陸に於ける日本人の運命は西班牙人の其と大差はなかつたであらうと。西班牙と同列に見るは愛國心がないと言はれるかも知れないが當時の西班牙人は、其侵略性に於て到底日本人の敵ではない。我々日本人は或は西班牙人ほども行かないかも知れぬ。又た反對に善く行つたとしても、和蘭人の如くなり了る外はあるまいと思ふ。日本の所謂武士道封建制度は、西班牙の『フキダル』と『エンコミエンダス』の制度との如くなつたかも知れぬ。私が斯く考へるのは人類の歴史の上に於て、世界を或時期の間財力を以て資本的に支配する運命がアングロサクソ

ン民族の上に在ることは、如何に箇々の出來事が異つて居たとしても、渝ゆ可からざる一の約束事ではあるまいかと思ふからである。

右は想像談であつて、其の當否は問題とする價値はあるまいが、現實の世界十六世紀以來成り來つた今日の世界の實勢としては、今後若干の時期アングロサクソン民族の資本的侵略又は支配時代の繼續することは如何なる工夫を凝らしても、到底之を變ずることは出來ないと言はざるを得ぬ。斯く申すと日本人として、其れは如何にも意氣地のない諦め方だとして戸水先生あたりには叱られるかも知れないが、事實を事實として認めるのが、一番意氣地のある考へ方だと信ずる我々は、左様考へる外はないのである。軍國獨逸、ザール露國が滅びたとて、武力侵略主義が全く其影を世界の表から消したと思ふのは早計である。然し世界は今其武力角逐に疲れ且つ飽きて居る。疲れはて居らぬ國は米國一ヶ國である。此米國を向ふに廻して貧國日本が、金の莫大にかゝる軍備の競争をしようなどとは、身の程を知らざるにも程があるし、日米開戦となつたとしても、或は戦争では勝つかも知れないが、英國海軍に封鎖された獨逸、今猶一部署實上封鎖されて居る露國の

悲惨な状態に余程似た状態が、日本を襲ふことは鏡にかけて見るが如くであつて、其結果
砲打若くは其以上の騒動が起るとしたら、戦には勝つても何にもならないのである。

三

マルクスは將來の社會革命の有望國として先づ獨逸を、而して稍遠き將來に於ける最
有望國として米國を考へて居た。其の稍遠きはマルクス死後益々遠くなつたと共に、マ
ルクスの豫想は裏切られて、米國と正反對の國情を持つ露國に革命が起つた。これはマ
ルクスの違算たること勿論であるが、其の違算は露國に就てよりも寧ろ米國に就てであ
ることを注意せねばならぬ。米國に於ける社會黨の無勢力はゾムバルトが十分之を説
明して居るが、戦時中及戦後の模様を見ると、ゾムバルトの考へたよりも又更に無勢力
であつて、資本主義の隆盛は實に想像にも及ばない程である。日本などは逆も齒が立た
ないのみならず、英國も陸若たらざるを得ない。此米國と財力侵略上の角逐を企てるな
どとは、日本に取つて此位無謀なる事はない。米國征伐論者が眞に米國を押し付けるこ

とを欲するなら、日米戦争などを唱へて居る暇に、如何にせば米國に於ける社會黨、無政府
黨が有力となり得るかを考へた方が適當であらう。然し其れは考へる丈け無駄な事であ
る。されば其れよりも猶無意味な日米戦争を考慮するなどは、馬鹿々々しくて話にな
らぬことである。即ち、當分の間は米國を押し付けるなどと云ふことは、全く意味を成
さぬことである。日本は武力に於ても財力に於ても、米國と衝突は勿論のこと、角逐など
することを金輪際断念す可きである。断念さへすれば、所謂『國難』は其れで雲散霧消す
る。

日本の『國難』は、米國からは來らず英國からも來らず、否、勞農露國からも断じて來ない。
日本の『國難』は日本から來る。日本の何から來るか、手近い者としては、武力侵略主義か
ら、遠い者としては、財力侵略主義から來る。日米開戦となつた曉恐る可きものは、東京の
空上に翔ける米國の飛行機ではない。東京の大阪の或は其の他處々の國民の腦中に飛
躍する『スペクトル』である。『スペクトル』は何萬馬力のモーターよりも大なる力を
持つ。此れが飛出すことが眞の恐る可き『國難』である。其れは決して米國からは來な

四 軍備制限は確かに實現し得る。

い、日本から飛來する。日本の國の使命は、財力侵略文明の爛熟し切つた後にあらねばならぬ。日本は侵略國として殆んど何の歴史をも有せぬ、これは日本の最大なる誇りたる可きである。將來に向つても、財力侵略國となる見込は甚だ乏しい、其の反對に武力侵略國となる見込はある。タトへ僅かの間なりとも、此の熱に浮されることありしたら、其れこそ折角非侵略國たりし國體の破壊であり、國粹の失墜である。日本は斷じて一切の誘惑を斥けて、世界の表に於ける最非侵略國として立たねばならぬ。

軍備制限會議は此日本に取つては好機會である。私の好機會と云ふのは決して對外的の意味ではない、對外的には好機會でも何でもない。或は『國難』論者の云ふが如くに成るかも知れない、左様成つても決して差支ない。好機會と云ふのは對内的である。桃太郎の花電車を非難する人が出來たと云ふ丈けでも甚だ結構だと思ふ、桃太郎電車一向差支ある譯ではない、唯だ人心の歸向が甚だ善い方へ向つた一の表徴として大いに喜ぶ可しと思ふ。米國に一杯喰はされるも結構、其れが爲めに日本人の心が緊縮して、少しでも非侵略心が力を得るようになれば、得る所失ふ所に遙かに勝れりと思ふ。反對に、日本

を押へ付け、英國を拘束することに『成効』する米國は、噴火山頭に舞踏するものである。米國の爲に眞に慮る人は、米人たると外人たるとを問はず、却つて此所謂『成効』を呪ふべきである。然し、アングロサクソン民族の或時期の間——其は必ず終がある——世界横暴が宿世の約束事としたら、右様になるのも亦前世の因縁であらう。然し此の『成効』は日本が之を妨げずとも、英國は必ず妨げるであらう。所謂毒を似て毒を制することは、米國に取つては、内からは當分起らないとしても、同じく財力侵略國たる而も同文同種たる英國から起る。これで世界の『平和』は當分維持せられることと思ふ。

四

日本は軍備制限を諾するから、同時に米國の財力侵略制限を代價として取ると云ふ考を懐く人もあるようであるが、これは餘り性急の考へ方である。我々の見る所、米國——英國は勿論として——は、今確かに軍備制限を實行しようとする誠意を幾分かは持つて居る。或は日本が會議に參列を拒んでも、軍備の制限だけは自發的に實行するかと思ふ。

其の反對に、財力侵略の制限は迎も考へて居らぬ、否々更らに手を擴げんと欲して居ると信ずる此點に觸れられることは、米國の斷じて承知し得ぬことで、其の最急所を突く所以である。日本が軍備の制限を最大事と考へて掛ると飛んでもない、大遠算をするに相違ない。日本が一指を染めることも六ヶ敷いのは、米國の財力侵略制限である。然るに之れを代價としてなら、軍備制限を諾しようと思ふのは、蝦で鯛を釣る程ではなくとも、鯉で鯛を釣らうとする位な虫の善い話である。米國たるもの決して其んな話に乗る迂濶な國ではない。米國の海軍は充實したとは云へ、其の侵略價値は到底其の財力の侵略價値と同日の談ではない。而して海軍の制限は決して獨り日本目當の提案ではない。否、最大の目當は英國であらう。日英米均しく海軍を制限すると云ふことは、英國は勿論のこと、米國も之を眞に望んで居るものと思ふ。故に日本にして、眞に誠意を以て相談に乗れば、少くとも海軍制限は——實行の技術問題は餘程困難を醸し、其の爲め或は有名無實となるかも知れないが——形式的丈けには確かに實現され、實質的にも聊かも知れないが、實現され得ると思ふ。而して其れ丈けでも結構千萬な事と思ふ。故に我々は此の際日

本は口頭斗りでなく、心の底から、海軍制限陸軍制限を眞面目に國是として、會議に向ふ可きである。此の誠意が唯一問題となる、外の事は何んでもない。我れ誠意を披瀝して彼に臨む、彼れ必ず之に應ずるものと信ずる。而して日本としては遠慮なく言ふ可きである。今日世界の平和を脅す武力の擴張は、其の最大の責任は米國の海軍大擴張にある。故に米國は眞に之を止め、之を制限する誠意を有することを明示することが、最も先決の問題である。米國にして此誠意を端的に示すならば、日本は大なる制限を必ず實行する十分なる誠意を有す、其方法は斯々爾々也と。外交的掛引などは駄目である、眞に誠意あること、懸引のないことを有力に提示して掛かなければ、何事も無駄であつて、至權一行の旅費丈けが損となるのが落である。故に斷言する、軍備制限必ず實現し得可し、而して其前提は、日本が其の實行の誠意を十二分に有し、之れを正直に會議上に披瀝するに在りと。

一兩日來の新聞記事では、日本の全權首座は現海相之に當ると云ふ。これは甚だ結構な事で、原敬氏の明斷と稱す可しと思ふ。其の意は、海相の手腕とか外交術とかを信賴す

ると云ふのではない、海相を首當事者とするによつて、日本は米國の最も懸念する日本海軍の制限を實行する意圖あることを、聊か具體的に示したことを喜ぶのである。これ、『國難』論者も安心して然る可きである、七博士諸君も小田原評定を見合せて宜しい、海相は能く幕僚と議を凝して、海軍制限の具體的實行案をチャント作り上げて置いて——先方の出次第などと兩端を持するは斷じて不可——之を秘さず包まず會議に提示せよ、これが何よりである。原氏が海軍の首腦者を全權首座にした所を見ると、氏は此度の會議の意味を可なり能く理解し、其れに對する日本の任務を正しい方向に盡さうとする念が多少あるように認められる。若し左様でないなら、改めて左様して貰ひたい、而して向後其の調子で進行して欲しいものである。繰返して云ふ、軍備制限は左迄難事ではない、日本さへ誠意を示せば、或る程度までは必ず實現される、而して其れ丈けでも結構千萬である。(一〇・九・一)